

# 脇山 I

— 県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告 —

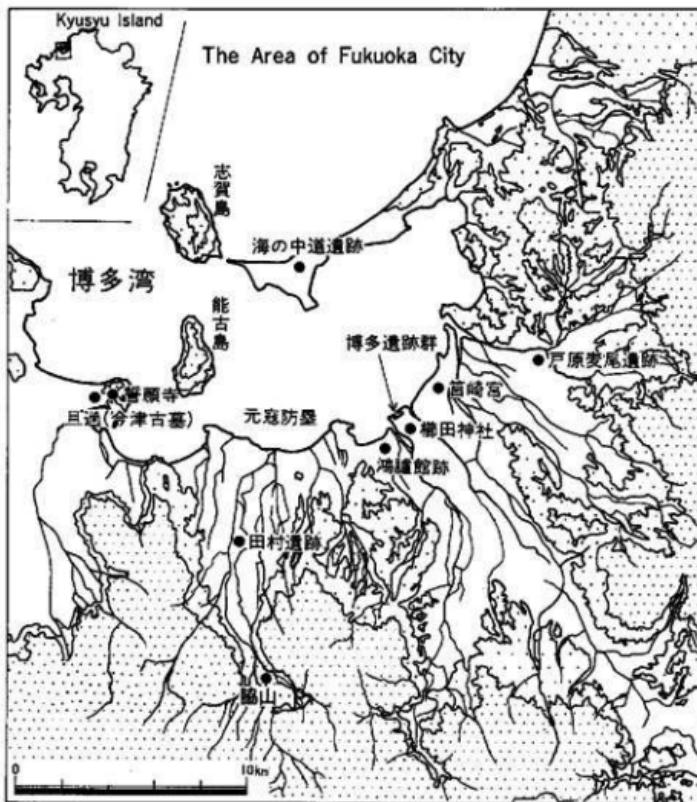
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第236集

1990

福岡市教育委員会

Waki yama 脇山 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第236集



### 福岡市域の道路の分布(縮尺約1/250,000)

遺跡略号 WKA

遺跡調査番号 8643

8722

8816

1990

## 福岡市教育委員会

## 序

福岡市西部の早良平野は豊かな自然と歴史を持つ地域であり、特にその南側は広大な農地と山林の広がる美しい景観を保っております。近年よりこの一帯で圃場整備事業が開始され、飯盛地区の圃場整備に伴う発掘調査では数々の大きな成果をあげ世の注目を浴びました。

早良区脇山地区では昭和61年度より8ヶ年計画で、県営圃場整備事業が始まりました。

このため福岡市教育委員会では、事業開始の61年度より埋蔵文化財の調査を開始し、現在にいたっております。

本書は、第1次調査より第3次調査の成果と、第4次調査の概要を報告するものです。調査の結果、旧石器時代から近世にいたる遺構と遺物を検出し、今まで明らかでなかった脇山地区の先人の生活の様子の一端をうかがえるようになりました。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてのみならず広く活用されることをねがいます。

最後になりましたが、調査にあたり数々のご協力を賜りました関係者、地元の皆様をはじめ、多くの方々に厚く御礼を申し上げます。

平成2年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

## 例　　言

1. 本書は早良区大字脇山地内の圃場整備に伴い昭和61年度から昭和63年度にかけて実施した脇山A遺跡の第1次から第3次調査の報告、および平成元年度の第4次調査の概要報告である。
2. 発掘調査は福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課が担当した。
3. 本書使用の遺構実測図は、第1次～第2次調査を常松幹雄、第3次調査を菅波正人・野村俊之・多田映子・有馬千恵美が行った。
4. 本書使用の遺物実測図は、第1次～第2次調査を常松・田中克子、細石核については杉山富雄、第3次調査を管波、木村絹子が行い、三稜尖頭器については吉留秀敏の協力を得た。
5. 本書使用の遺構写真は、第1次～第2次調査を常松、第3次調査を菅波・野村が、遺物写真は第1次～第2次調査を常松、第3次調査を菅波が撮影した。
6. 本書使用の遺構、遺物挿図の整図を第1次～第2次調査を常松・杉山・田中、第3次調査を菅波・野村・吉田扶希子・松尾秋代が行った。
7. 本書使用の方位は磁北である。
8. 本書使用の脇山地区空中写真(PL.1)は国土地理院昭和51年撮影を縮小したものである。
9. 本書の執筆は、第1次～第2次調査を常松・杉山・田中、第3次調査を井澤洋一・菅波・野村、第4次調査を井澤・池田祐司がそれぞれ担当した。
10. 本書の編集は各担当者の協議の上行った。
11. 本調査出土遺物および調査記録は、今後福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開、活用される予定である。

## 本文目次

第1章 はじめに.....	2
1. 調査の経緯.....	2
2. 発掘調査の組織.....	3
第2章 遺跡の位置と環境.....	5
第3章 第1次調査の報告.....	7
1. 第1次調査の概要.....	7
2. 造構と遺物.....	9
第4章 第2次調査の報告.....	15
1. 第2次調査の概要.....	15
2. 造構と遺物.....	17
第5章 第3次調査の報告.....	23
1. 第3次調査の概要.....	23
2. 試掘調査の成果.....	23
3. 造構と遺物.....	23
4. まとめ.....	40
第6章 第4次調査の概要	
(谷口地区) .....	41
1. 調査に至る経緯.....	41
2. 立地と環境.....	41
3. 造構と遺物.....	41
(会田地区) .....	43
1. 調査に至る経緯.....	43
2. 立地と環境.....	43
3. 造構と遺物.....	43

## 表 目 次

Tab. 1 調査概要の一覧.....	2
Tab. 2 土塙一覧表.....	28

## 挿 図 目 次

Fig. 1 県営農場整備事業脇山地区計画図(縮尺)	
Fig. 2 周辺の遺跡の分布(縮尺1/75,000).....	6
Fig. 3 1次調査の範囲と調査区の位置図(縮尺1/2,000) .....	8
Fig. 4 1号土塙実測図(縮尺1/20).....	9
Fig. 5 1号土塙位置図(縮尺1/400) .....	9
Fig. 6 1号土塙出七遺物実測図(縮尺1 / 3).....	10
Fig. 7 繩文時代の遺物実測図・土器(縮尺1 / 3).....	11
Fig. 8 繩文時代の遺物実測図・石器(縮尺1 / 1 · 1 / 2).....	12
Fig. 9 古代・中世の土器実測図(縮尺1 / 3).....	13
Fig. 10 2次調査の範囲と調査区の位置図(縮尺1/2,000) .....	16

Fig.11	細石核実測図(縮尺1/1).....	17
Fig.12	縄文時代の遺物実測図・土器(縮尺1/3).....	19
Fig.13	縄文時代の遺物実測図・石器(縮尺1/1・1/2).....	20
Fig.14	弥生時代の遺物実測図・土器(縮尺1/3).....	21
Fig.15	その他の遺物実測図(縮尺1/3).....	22
Fig.16	3次調査の範囲と調査区の位置図(縮尺1/2,000) .....	24
Fig.17	遺構配置図(縮尺1/650) .....	25
Fig.18	焼土塙分布図(縮尺1/800) .....	26
Fig.19	遺構実測図・SK-1~7(縮尺1/40).....	29
Fig.20	遺構実測図・SK-8~12(縮尺1/40).....	30
Fig.21	遺構実測図・SK-14~17・19・20、SX-18(縮尺1/40).....	31
Fig.22	遺構実測図・SK-21~28(縮尺1/40).....	32
Fig.23	遺構実測図・SK-29~35(縮尺1/40).....	33
Fig.24	遺構実測図・SK-37~40(縮尺1/40).....	34
Fig.25	遺物実測図(縮尺1/3・1/1).....	36
Fig.26	遺物実測図(縮尺1/3).....	37
Fig.27	遺物実測図(縮尺1/3・1/1).....	38
Fig.28	遺物実測図(縮尺1/3・1/1).....	39
Fig.29	4次調査の範囲と調査区の設定・谷口地区(縮尺1/2,000) .....	42
Fig.30	4次調査の範囲と調査区の設定・会田地区(縮尺1/2,000) .....	44

## 図版目次

- PL. 1 脇山全景・航空写真(縮尺1/15,000)
- PL. 2 第1次発掘調査風景3区(南東から)、9区(東から)
- PL. 3 第1次調査8区南(東から)、8区北(東から)
- PL. 4 1号土塙(7区)発掘作業(西から)、1号土塙(西から)
- PL. 5 第1次調査の出土遺物・1
- PL. 6 第1次調査の出土遺物・2
- PL. 7 第2次調査5区(南東から)、6区(南から)
- PL. 8 第2次調査3区(南東から)、3区(南西から)
- PL. 9 第2次調査の出土遺物・1
- PL. 10 第2次調査の出土遺物・2
- PL. 11 第3次調査・調査区東側(東から)、調査区西側(西から)
- PL. 12 焼上塙・SK-01(北から)、SK-02(北から)、SK-05(東から)、SK-09(西から)
- PL. 13 焼土塙・SK-12(西から)、SK-14(西から)、SK-11(北から)、SK-17(西から)
- PL. 14 焼上塙・SK-25(東から)、SK-32(西から)、SK-33(南から)、SK-34(東から)
- PL. 15 焼土塙・SK-35(南から)、SK-39(西から)、SK-38(南から)
- PL. 16 焼土塙土層断面・SK-01、SK-02、SK-04、SK-05、SK-06、SK-10、SK-12、SK-19
- PL. 17 第3次調査の出土遺物(土器)
- PL. 18 第3次調査の出土遺物(石器)
- PL. 19 第4次調査・谷口遺跡全景、山裾をめぐる旧道

# I. 脇山 A 遺跡

## 埋藏文化財調査報告



発掘作業風景 第1次（9区）

# 第1章 はじめに

## 1. 調査の経緯

当初、脇山地区の圃場整備事業は、約100haに及ぶ地域を対象としたものであった。昭和59年度のことである。これを受けた埋蔵文化財課（当時文化課）では、全体の施工計画の作成に必要な資料を得るために昭和60年3月18日から22日にかけて試掘調査を実施した。この時の試掘は、分布調査によって土器が多く出土する川原田から会田の北東部（A区）と石塚の南部から脇山小学校の西側にあたる小ノ原地区（B区）及び小学校を隔てた東側一帯（C区）に限って行った。A区は小笠木川の氾濫原にあたり、遺構の可能性は少ないと予測が出た。B区については柱の痕跡が認められたが、その密度は薄いものであった。C区では試掘溝の一ヶ所で遺構が確認された。地表から40~70cmの深度である。

昭和60年度になって事業計画は、82.9haを対象とした昭和61年度から8ヶ年度にわたるものへと具体化していった。

埋蔵文化財課では、初年度の工事が予定される地区について昭和60年12月11日から19日にかけて試掘を行った。この時に小穴や木炭を混じえる土壌が確認されたが、時期を特定できる遺物は見つかっていない。こうして61年度は道路・水路部分約2,600m<sup>2</sup>と削平をうける水田面積3,300m<sup>2</sup>の計5,600m<sup>2</sup>について本調査が必要な面積が算定された。

61年度の工事区については休耕が原則とされたが、土地改良区と地権者との調整が整った10月中旬から調査を開始する運びとなった。

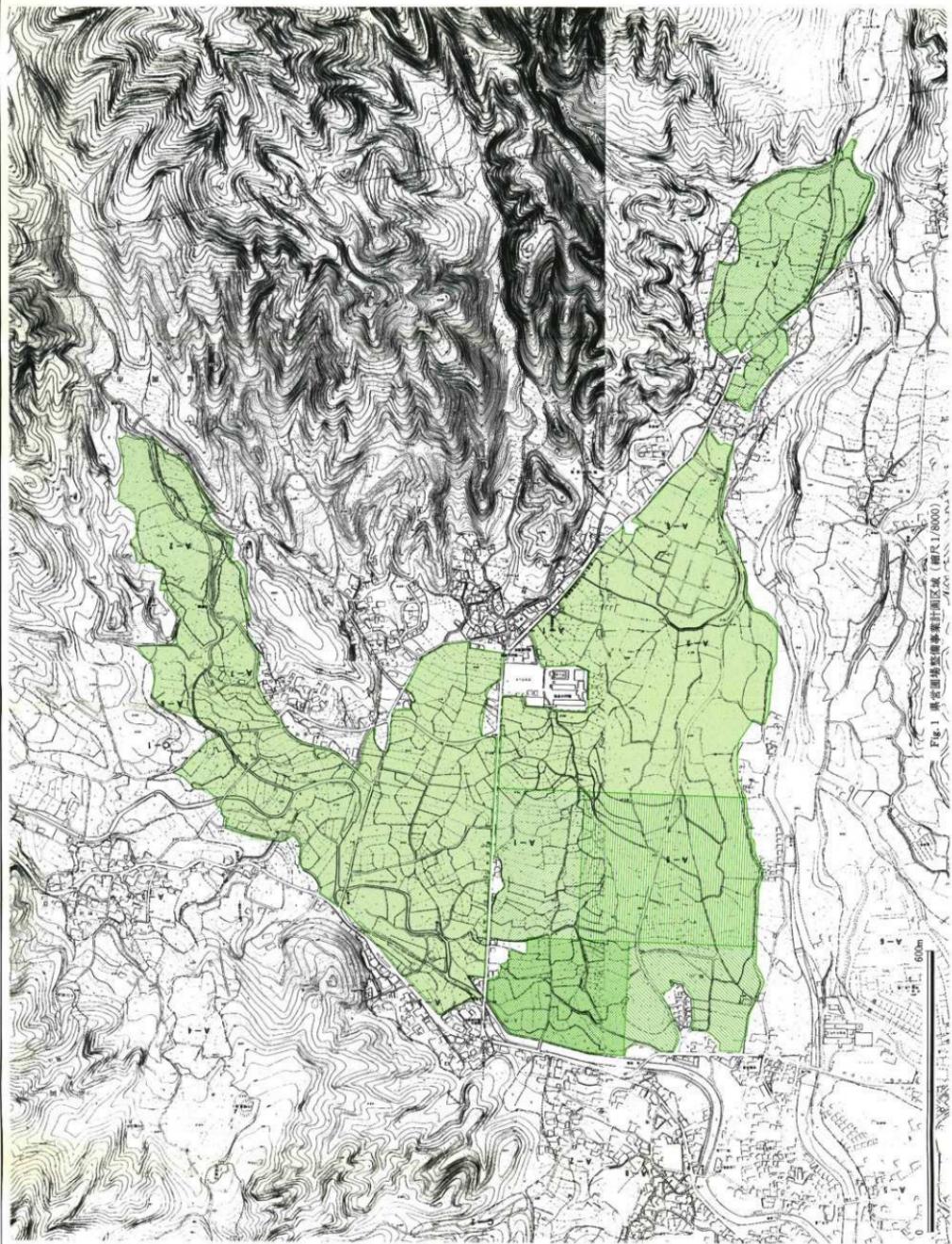
Tab. 1 調査概要の一覧

次 数	遺跡調査番号	遺跡略号	調査地地籍	分布地図番号
1 次	8643	WKA-1	早良区大字脇山字石塚・大栗・会田	早良10・17
2 次	8722	WKA-2	早良区大字脇山字川原田・会田	早良10・17
3 次	8816	WKA-3	早良区大字脇山字会田	早良10・17
4 次	8932	TNG	早良区大字脇山字谷口	早良 18
	8933	WKA-4	早良区大字脇山字川原田・会田	早良 10

次 数	年 度	事業量	調査対象面積	調査面積	調 査 期 間
1 次	61年	4.5ha	5,600m <sup>2</sup>	5,600m <sup>2</sup>	1986年10月14日~87年1月14日
2 次	62年	5.0ha	7,150m <sup>2</sup>	5,000m <sup>2</sup>	1987年8月4日~87年12月28日
3 次	63年	11.4ha	6,636m <sup>2</sup>	6,636m <sup>2</sup>	1988年9月26日~88年12月15日
4 次	平成元年	5.6ha	56,000m <sup>2</sup>	23,227m <sup>2</sup> (予定)	1989年7月1日~90年2月28日
		8.76ha	87,600m <sup>2</sup>	13,559m <sup>2</sup> (予定)	11月1日~90年2月5日

图1 地质构造与岩层分布图

1:60000



## 2. 発掘調査の組織

### 1次調査（61年度）

調査委託： 福岡市農林水産經濟局農業土木課  
調査主体： 福岡市教育委員会、教育長 佐藤善郎  
調査総括： 埋蔵文化財課長・柳田純孝、埋蔵文化財第二係長・飛高憲雄  
調査庶務： 埋蔵文化財第一係・岸田隆  
調査担当： 埋蔵文化財第二係・力武卓治、常松幹雄  
調査作業： (一次) 青柳聖子、池田山美、大鶴栄子、大鶴キミ、大鶴タカ、大鶴みえ、大鶴道代、緒方寿々子、緒方ミヨ、緒方柳子、尾崎恵美子、尾崎久美子、尾崎ケイコ、尾崎幸子、尾崎利一、尾崎優子、後藤早苗、後藤美代子、坂田美佐子、重松摩知子、柴田タツ子、柴田憲子、鳴田洋子、高田たえこ、瀧良子、戸沢日登美、中村まゆみ、永田睦子、樋口久子、樋口房江、前田紀代美、馬男木アサエ、馬男木スギ、馬男木八重、松尾真澄、馬奈木カヅ子、馬奈木桃恵、真名子朝子、真名子悦子、真名子幸二、真名子恵子、真名子司、真名子敏子、真名子瑞枝、真名子ミヨ、真名子ユクノ、宮原富代、森葉子、安永アヤ子、櫻井純子、結城多美子、渡辺頼子、和田照代

### 2次調査（62年度）

調査委託： 福岡市農林水産經濟局農業土木課  
調査主体： 福岡市教育委員会、教育長 佐藤善郎  
調査総括： 埋蔵文化財課長・柳田純孝、埋蔵文化財第二係長・飛高憲雄  
調査庶務： 埋蔵文化財第一係・岸田隆  
調査担当： 埋蔵文化財第二係・力武卓治、常松幹雄  
調査作業： (二次) 大鶴栄子、大鶴キミ、大鶴タカ、大鶴みえ、大鶴道代、緒方寿々子、緒方ミヨ、緒方柳子、尾崎久美子、尾崎幸子、尾崎利一、尾崎優子、坂田美佐子、柴田憲子、高田たえ子、中村まゆみ、樋口久子、前田紀代美、馬男木アサエ、馬男木スギ、馬男木八重、松尾真澄、馬奈木カヅ子、馬奈木桃恵、真名子悦子、真名子恵子、真名子敏子、真名子ミヨ、真名子ユクノ、森葉子、結城多美子、和田照代

### 3次調査（63年度）

調査委託： 福岡市農林水産經濟局農業土木課  
調査主体： 福岡市教育委員会・教育長 佐藤善郎  
調査総括： 埋蔵文化財課長・柳田純孝、埋蔵文化財第二係長・飛高憲雄  
調査庶務： 埋蔵文化財第一係・岸田隆

調査担当： 埋蔵文化財第二係・井澤洋一、野村俊之 埋蔵文化財第一係・菅波正人  
調査作業： 青柳寿子、有田吉太、有馬千恵美、伊藤みどり、井上清子、井上トミ子、  
井上磨知子、井上ムツ子、今村加代子、因ヨシ子、牛尾秋子、牛尾二三子、大鶴タカ、大鶴多喜子、大鶴ヨネ子、尾崎久美子、尾崎利一、奥園雄一、  
尾園佳枝、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、小柳和子、多田映子、中村  
まゆみ、辻節子、箱田香代子、平川史子、藤井キミエ、松尾真澄、馬男  
木アサエ、馬男木スギ、馬男木八重、真名子悦子、真名子キミヨ、真名  
子時雄、真名子敏子、三谷朗子、森邦彦、山口タツエ、横溝恵美子、横  
溝カヨ子

#### 4次調査（平成元年度）

調査委託： 福岡市農林水産経済局農業土木課  
調査主体： 福岡市教育委員会・教育長 佐藤善郎  
調査総括： 埋蔵文化財課長・柳田純孝、埋蔵文化財第二係長・柳沢一男  
調査庶務： 第一係・安倍 徹  
調査担当： 文化財主事・井澤洋一、第一係・常松幹雄、第二係・野村俊之、池田祐  
司  
調査作業： 青柳寿子、青柳美智子、青柳律子、有馬千恵美、出田澄子、井上愛子、  
井上清子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上磨智子、井上ムツ子、因ヨシ  
子、大鶴タカ、大鶴道代、緒方券々子、緒方みき、緒方柳子、小川泰樹、  
川口シゲノ、北崎明代、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴  
子、栗木和子、小柳和子、辻スミ子、坂本ハツ子、佐藤みづほ、清水邦  
子、正崎泰代、高田玉恵、多田映子、田中宣親、谷吉美、辻節子、鶴山  
きみえ、富崎栄子、永井鈴子、永井ゆり子、中園登美子、西嶋彰子、西  
嶋タツノ、西嶋ムラ子、西嶋洋子、箱田香代子、土生喜代子、土生ヨシ  
子、原ハナエ、蟠口久子、平川土枝、平川富美子、平川伸子、平川史子、  
平川真鈴、広瀬梓、福田小菊、古川千賀子、細川友喜、堀尾久美子、真  
子アキノ、松尾秋代、松尾真澄、真名子アサエ、真名子キミヨ、真名子  
シズエ、三谷朗子、森山早苗、柳浦八重子、山口タツエ、山路茂、山下  
アヤ子、山田トキエ、山田ヤス子、結城タカ子、結城多美子、結城チヨ  
コ、横尾泰広、横溝恵美子、横溝カヨ子、吉岡勝野、吉岡光子、吉田扶  
希子、脇坂チカ、脇坂唯子

## 第2章 遺跡の位置と環境

広義の福岡平野は、東の三郡山地と西の長垂の山塊に狭まれた部分をさす。またその南は背振山から派生する山々によって限られている。

この福岡平野の中、油山より派する鴻巣山の丘陵以西は早良平野と称される一帯である。本報告で扱う脇山は、早良平野の南にあたり、扇状地の支部をさらに奥に進んだ所に広がる田園地帯である。

筑前国風土記によると、江戸時代の脇山郷は椎原、板屋、小笠木、西村、脇山、内野、石釜、曲淵の八村を含んでいたが、明治22年の町村制によって椎原、板屋、小笠木、脇山の4村を以て脇山村が組織された。

歴史的背景を文書や伝承をもとに遡ると、脇山は背振山東門寺の寺領の北麓に位置しており、門戸口、大門、上城戸、下城戸などにその名跡を示す小字名が残っている。東門寺の縁起は定かではないが、奈良時代以前から高僧が入山した記事が見える。その後、中世の山岳信仰の隆盛と共に栄え、西油山天福寺との争乱によって焼失している。戦国時代に龍造寺氏によって再建されたが、戦火によって灰燼に帰している。

次に田畠の開発については、比丘尼様の伝承がある。これは9世紀後半の貞觀年間に、紀伊国から来た比丘尼が、椎原の下臼に堰を築いて水路を開いたというものである。脇山字谷口の樁の大木の側に比丘尼墓と称される石塔があるが、様式は中世のものである。

戦国時代の脇山は、北東に築かれた小出部氏の山城・荒平城の眼下に在った。脇山は、小笠木川や椎原川沿いに肥前や筑紫郡に抜ける郡道の要衝でもあった。

これまで脇山周辺での本格的な考古学の調査は、13世紀から15世紀にかけての掘立柱建物、土塙、井戸などが検出されている。また脇山と馬立山を隔てた西の峯遺跡の調査では、奈良時代の焼土塙や掘立柱、中世の土塙幕や掘立柱などが調査されている。

このような脇山の地域史を語るうえで、昭和の主基斎田が営まれたことも言及せねばならない。これは昭和天皇即位の際の大嘗祭に用いられる新穀を穫るための祭田である。昭和3年2月に、宮内庁から主基斎田は福岡県、慈紀斎田は滋賀県という通達があり、最終的に脇山村が主基の候補地となった。

現在の祭田は、字野中に2ha程が茶園となっており、その西奥に祭田を記念する碑が立てられている。我が国の茶祖としても知られる栄西禪師が、帰朝後、最初に茶種を蒔いた場所は聖福寺境内のほかにこの主基斎田に近い石上という説がある。

参考文献：早良郡誌 福岡県早良郡役所編 1973年

ふくおか歴史散歩 第1巻 福岡市 1982年



Fig. 2 周辺の畠跡の分布 (縮尺 1/75,000)

## 第3章 第1次調査の報告

### 1. 第1次調査の概要

昭和61年度の調査は、字石塚を中心とし、一部字大楽、会田にかかる4.5haにわたる部分である。圃場整備の対象区域のなかでは北西に位置する標高70m前後の一带にあたる。

工事区域が確定したのは、夏も終わりに近づいた頃で、刈入れを待って調査を行うことになった。工事は、3月を目指して造成工事が進められることになっており、この中、調査対象区は道路・水路などの構造物が計画されている箇所と、田面の出来高によって影響を受ける部分についてである。田面が削平される場合に加えて、出来高が従来の田面と同レベル又は若干の盛土であっても、表土直下で遺構が確認される場合は基盤土を整地する段階で遺構が破壊され、調査が必要となる。

昭和60年度の試掘の時点では、遺構の掘り込みかどうか不明な箇所があったため、新たにトレンチを拡張して、確認に努めた。

脇山の旧田面は、上下間に段差があるため構造物の計画に沿って試掘溝を延長することはできない。そこで、現況の田面ごとに遺構確認を行なった。

その結果、遺物分布のとくに密な10箇所について拡張を行なった。右図の1区～10区までの部分が各調査区の位置である。この中、縄文土器の分布は8・9・10区など調査区の南側に集中している。また古代・中世の遺物は、やや北側の調査区に多い傾向があるようである。

また明確な遺構は、7区の土塙のみであったが、他の地区については1辺2m程度の部分を設定して掘り下げを行なった。右の2枚の写真はその際のもので、基盤土の地表から1mくらいまでの構成を示している。

1次調査の各区に共通する傾向は、暗褐色の粘質土層下が挙大から小羊大の花崗岩の疊層となることである。また地表下1mの位置では、花崗岩が風化したものによる真砂が形成されている部分がある。



1次調査区の風景(背後は荒平城)



基盤土の堆積状況(7区・西より)

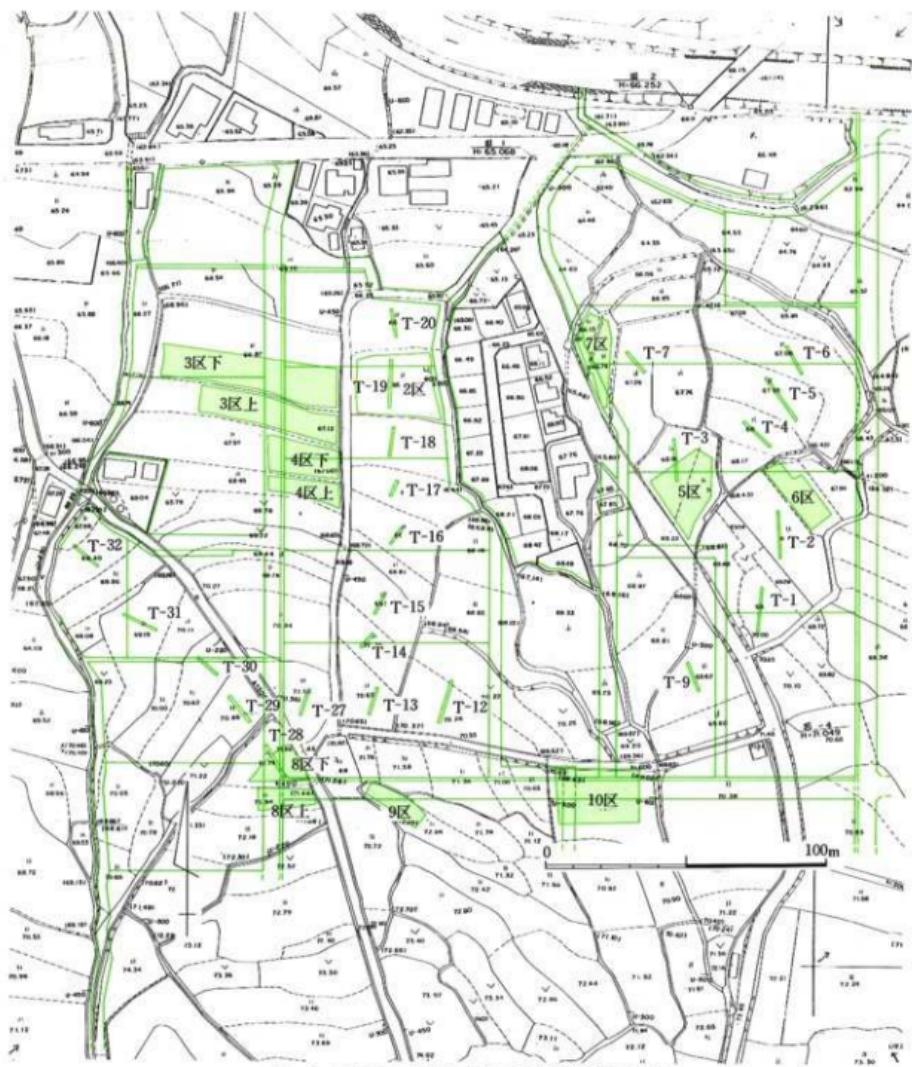


Fig. 3 1次調査の範囲と調査区の位置図(縮尺1/2,000)

■は試掘トレンチ、又は調査範囲を示す。

## 2. 造構と遺物

1次調査では、7区の中世の土塙を除いて明らかな造構は検出されていない。出土した遺物の殆どは、基盤土から出土したもので、包含層出土の遺物という表現が適切である。

出土遺物には、縄文時代後～晩期の精製・粗製の土器・石器や古代の須恵器や土師器、中世の陶磁器などがある。

### 土 塙

7区の耕作土直下で検出された土塙である。長径95cm、短径75cmの楕円形のプランである。塙の中央に3つの花崗岩の礫があり、その周囲に白磁・土師皿・石鍋・瓦器などの遺物がある。ほぼ完全な形状は、土師皿のみで、あとは破片である。

土塙と包含層出土の遺物で接合したものがあることから、土塙の上部は耕作などによって削平をうけていることが判る。7区については、一辺2m程のテストピットも入れてみたが、関連する造構は検出できなかった。

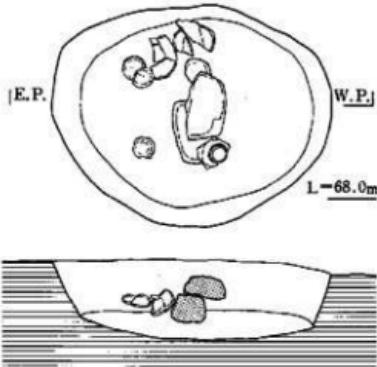


Fig. 4 1号土塙実測図(縮尺1/20)

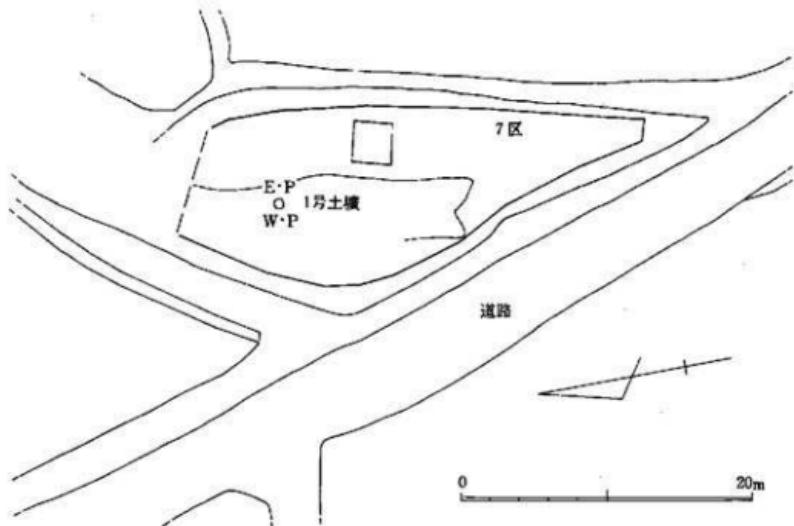


Fig. 5 1号土塙位置図(縮尺1/400)

### 1号土塙出土遺物 (Fig. 6)

1は黒色土器の碗である。口径は17cmで、器高は5.9cmを測る。外面の下半は淡黄褐色、上半から内面にかけては灰黒色を呈す。ほぼ全形を存す。2は、瓦器碗で、全体の3分の1を存する。口径16.8cm、器高は5.7cmを測り、内面から体部外面に丁寧な研磨を施している。3は白磁碗で、底部から口縁の一部を存する。白色の強いオリーブ色で、内底見込みの釉を輪状に剥き取っている。4は、滑石製の石鍋で、全体の約3分の1を存する。口径は14cmを測る。口縁に方形の耳を有し、外面は横方向の削り調整が施されている。5～8は、土師皿である。7以外はほぼ全形を存する。口径は8.6cm程度で、底部はヘラ切りで、8の様に板目圧痕が残るものもある。9・10は土師器の杯である。9は、全体の3分の1を存し、復元口径は16cmである。内面は研磨、外面は回転ナデを施す。10は全体の3分の1を存し、復元口径は14.8cmを測る。内外面ともに研磨調整を施している。

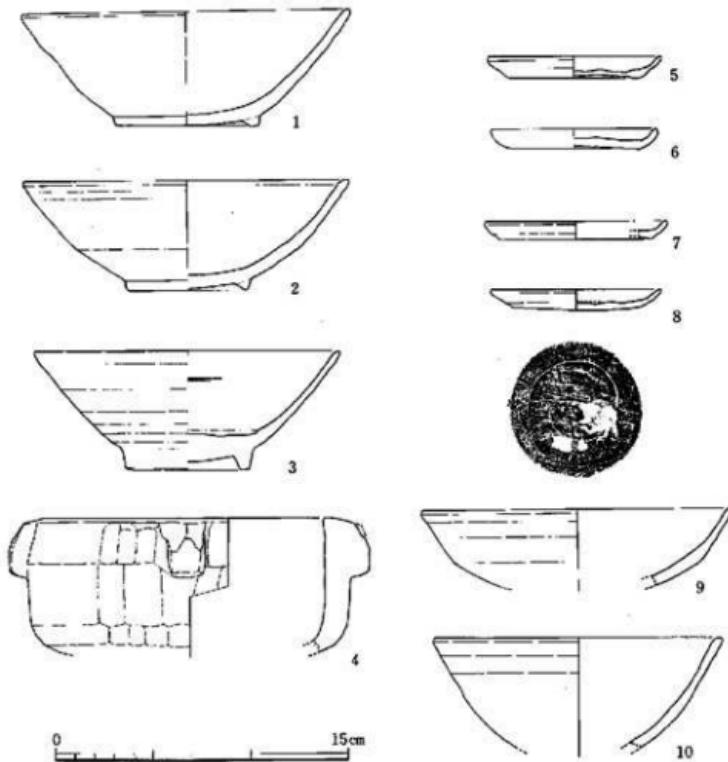


Fig. 6 1号土塙出土遺物実測図(縮尺1/3)

## 縄文時代の遺物 (Fig. 7・8)

土器 (Fig. 7, 11~18) いずれも、縄文時代後期末から晩期初頭の土器である。図化できる資料は少ないが、精製土器 (11・13) と、粗製土器 (12・14~18) に大別される。11は、浅鉢形土器である。内外面とも淡い赤褐色を呈し、かなり精致な磨研調整を施す。口径25.2cmを測る。口縁は波状を呈し、わずかに内湾しながら大きく外に開く。波頂部と、皿状の肩部からわずかにくびれた肩部には、楕円凹点文が施される。口縁文様帶には、波頂部を中心として、左右対称に6条の沈線がめぐる。13は、半精製の浅鉢形土器である。黒色を呈し、外面肩部から

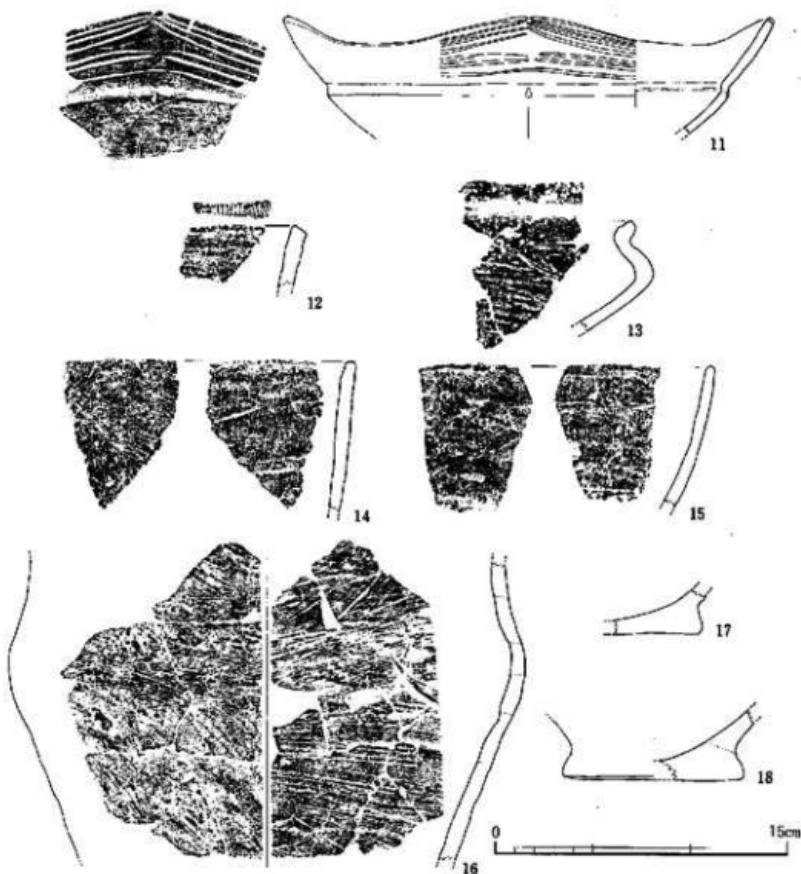


Fig. 7 縄文時代の遺物実測図・土器(縮尺1/3) (11.8cm, 12-13-14.10区, 15-16-17-18.9区)

内面にかけて磨研調整を施すが、外面体部は、まず条痕を施した後に、雑な磨研調整を加えており、先に施した条痕文痕が残る。口縁は短く外反し、肩部は強く張り出しが、内面には棱を作らず丸味を帯びている。口縁内面には浅い段を有する。

12・14～18は、いずれも粗製の深鉢形土器である。淡い黄褐色～赤褐色を呈し、胎土のきめも粗い。12・14・15は、口縁はほぼ直立しており、内外面とも、板状工具によるナデ、或いは粗いナデ調整を施す。12は、口縁端部が平坦になっており、二枚貝の放射肋を押圧している。16は、胴部がゆるく「く」の字型に屈曲し、口縁はやや上窄まり気味に外反すると思われる。内外面とも条痕が施されるが、屈曲部から上半部にかけて、上から雑なナデ調整を加えている。17・18は底部で、内外面ともナデ仕上げである。

石器 (Fig. 8 19～24) 石鏃 (19～23)・石匙 (24)、他に黒曜石の剝片が出土している。

いずれも包含層から一括して出土したもので、所属時期は不明確であるが、その形態や、共伴土器が、縄文時代のものを除くと古代以降のものであることにより、一応ここでは、縄文時代の遺物の頃に記載することにした。

19～22は黒曜石製、23はサヌカイト製の石鏃である。19は、素材剝片の縁辺に剝離調整を施し、両面に素材剝片の主要剝離面と大剝離面を残す、いわゆる広義の剝片鏃である。長さ1.4cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm。20～23は、かなり形が整っており、両面とも全面にていねいな二次加工が施される。20は、長さ1.3cm、幅1.0cm、厚さ0.2cmと、かなり小形である。22は、全面にかなり細かな剝離調整を加えているが、片側辺と基部の縁辺は刃を作り出していない。長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm。23は、長さ2.8cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmと、他の4点に比べるとやや大きく、脚部が比較的長く、刃先から脚部にかけて、ゆるい段を有する。

24は、サヌカイト製のいわゆる横型の石匙である。横長の剝片を素材としており、素材剝片の打面側に“つまみ”を形成する。縁辺にのみ、両面から剝離調整を加えている。刃部は比較的直線的で、側辺はゆるく外弯する。長さ3.2cm、幅5.0cm、厚さ0.8cm。

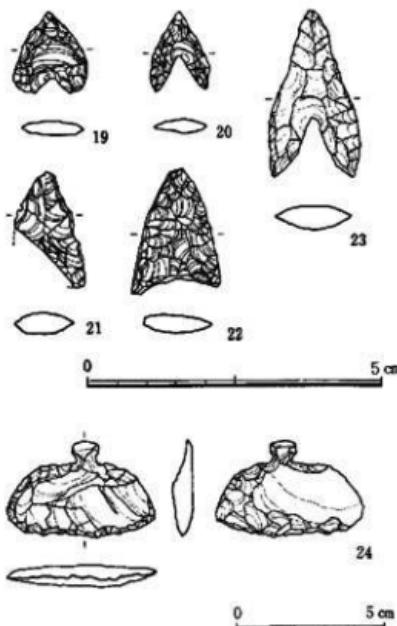


Fig. 8 縄文時代の遺物実測図・石器(縮尺1/1・1/2)  
(19;3区, 20-23;7区, 21-24;1区, 22;10区)

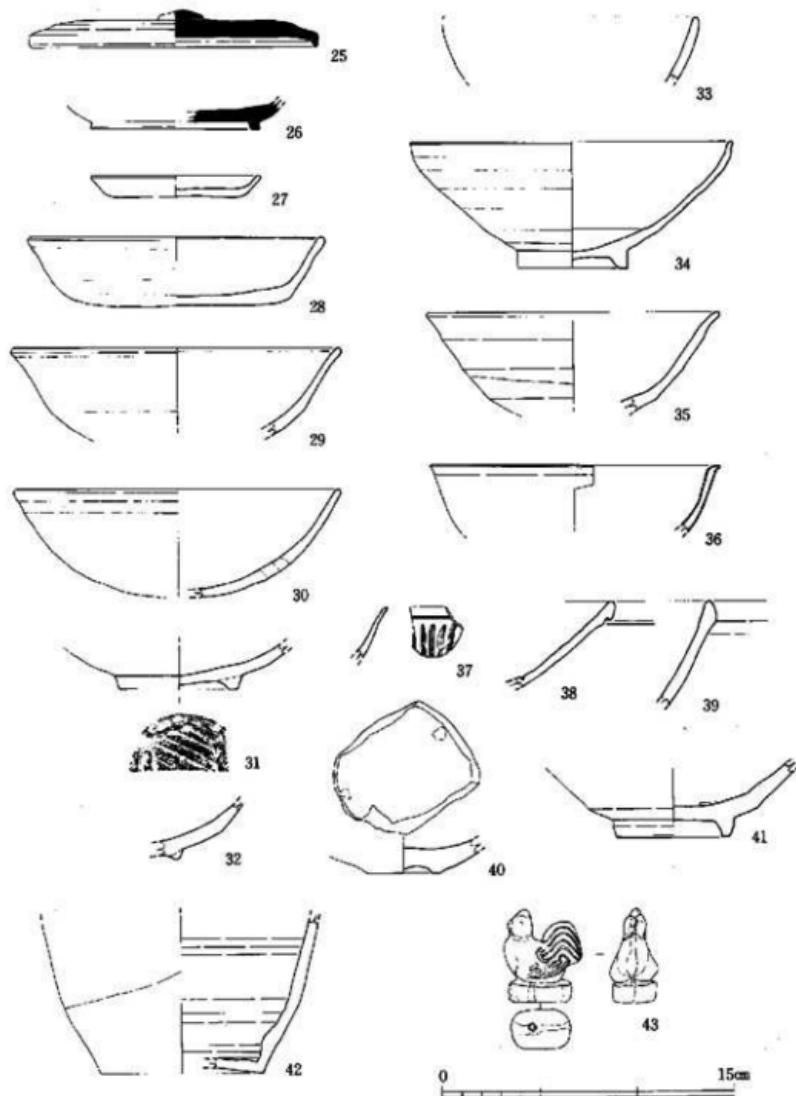


Fig. 9 古代・中世の土器実測図(縮尺1/3)  
(25-26-40-41;4区, 27-32-39-42;1区, 33-35-38;2区, 37-43;1区)

### その他の遺物 (Fig. 9)

量的には少ないが、遺物は多様である。図化した遺物以外では、土師器壺・皿の断片が多く他に、明代の染付・陶器・滑石製の石鍋片等が出土している。

須恵器 (25・26) 25は蓋で口径14.8cm、高さ1.9cmを測る。口縁部は直立し、縁部が屈曲する。外天井部は回転ヘラ削り調整である。26は高台付壺で、底径は8.8cm。外底部はヘラ切り離しのまま、未調整である。

土師器 (27~32) 27は皿である。口径8.8cm、器高1.1cm。外底部はヘラ切りの後、ナデを施す。28~30は壺である。28は口径15.2cm、器高3.5cm。外底部はヘラ切りと思われ、上からナデ調整を施す。板目压痕らしきものが残る。29・30はいずれも丸底壺で、口径はそれぞれ、17.0cm、16.6cm。31は碗の底部で、高台径は6.0cm。外底部に板目压痕が残る。32は黒色土器碗の底部である。内面のみを焼したと思われる。外面に雑なヘラミガキが認められる。

青磁 (33) 33は口縁がやや内弯気味の無文碗である。口径は13.0cm。灰白色胎土に、青味を帯びたオリーブ色の釉を施す。

白磁 (34~39) いざれも碗である。34は口径16.8cm、器高6.5cm、高台径2.9cm。高台はやや低めで、内面を斜めに外面を垂直に削る。高台から直線的にのびた体部は、口縁付近でやや垂直に屈曲し外反する。見込みとの境に浅い段を有する。淡い黄白色の胎土に、黄白色の半透明釉を施す。体部下半は露胎である。35は口径15.2cm。内弯気味の体部から大きく外に開き、口縁はやや外反する。黄白色の胎土に、ややくすんだ不透明の黄白色の釉を施す。36は口径15.2cmの輪花碗である。口縁は外反しながら先細りとなる。灰白色的胎土に、やや黄味を帯びた透明釉を施す。37は小碗である。白色で、体外面に継ぎの刻線が入る。38・39は玉縁口縁である。38は灰白色的胎土に、やや黄味がかった透明釉が施される。見込みに沈澱線をめぐらす。39は黄白色的胎土に、やや半透明の釉がかかる。

黄釉陶器 (42) 瓢の底部である。淡い灰褐色の胎土に、黄味の強い緑黄色の釉を施す。内面と体外部下半から底部は露胎。底径は8.4cm。

朝鮮陶器 (40・41) 40は朝鮮系陶器と思われる。高台はわずかに作り出されており、淡赤褐色の胎土に、白濁した褐色の不透明釉が内面に施される。見込みに目痕が残る。41は粉青沙器刷毛目碗の底部である。灰白色的胎土に、やや黄味がかった灰白色的釉を施す。内面に刷毛口を施す。全面に施釉しており、見込みと量付の部分に目痕が残る。

43は、土師質の鶏の土製品である。胎土のきめは細かく、重量感がある。型とりで、合わせ目の部分は削られ平坦になっている。全体に赤色顔料が塗布されていたと思われる。下面の中央よりやや手前に、直径0.4cm、長さ約1cmの穿孔を施す。二次調査でも、同様の猫の土製品が出土している。

## 第4章 第2次調査の報告

### 1. 第2次調査の概要

昭和62年度の調査は、字川原田と会田にかけての面積5.0haにわたる部分である。圃場整備の対象区域中、北東に位置する標高65~70mの一帯にある。

工事区域については当該年度内の休耕機置がとられており、調査事務所も61年度工事による非農用地内に地権者の厚意によって場所を確保できたため、8月から着手の運びとなった。

調査対象区は、前年に引き続いて、道路・水路などの構造物の予定地と田面の出来高によって影響を受ける部分についてで、細部の基準については前年に従った。

調査対象面積は、図上で7,150m<sup>2</sup>とし、現況の田面ごとに遺物確認を行ない、とくに遺物の分布が密な8ヶ所について拡張を行なった。右図の1区~8区が各調査区の位置である。

20ヶ所の試掘の結果、字川原田の一帯は、表土下の基盤土が即砂層で、さらに表土から70cm程掘り下げる砂礫層となることから、小笠木川の氾濫原と考えられる。また会田のほうは耕作土下が暗黄褐色の粘質土や礫層、あるいはその両方が入り混じった箇所などによって構成されている。

2次調査では明確な遺構は検出されなかったが、縄文時代の遺物は4区・5区、弥生時代の遺物は5区に分布が集中する。また1区では細石核など旧石器時代の遺物も出土しており、遺跡の上限を縄文後期から遡らせるうえで有力な資料を得た。

古代から中世にかけての遺物も包含層中から出土している。これは1次調査にも共通することだが、耕地開発の時期や背後の山岳信仰にまつわる文物の移動、さらには荒平城を取り巻く状況を傍証する資料である。龍泉窯系の青磁碗で表面が磨滅した遺物なども見られることから、より南側での遺構の存在が予想される。

2次調査は、約5,000m<sup>2</sup>の面を拡張し、12月28日に調査を終えた。



試掘調査風景1(トレンチ3 南から)



試掘調査風景2(トレンチ2 南から)



Fig. 10 2次調査の範囲と調査区の位置図(縮尺1/2,000)

■は試掘トレンチ、又は調査範囲を示す。

## 2. 造構と遺物

2次調査では、明らかな造構は検出されておらず、造構は表土下の包含層から出土している。旧石器時代の細石核や弥生土器が新たに確認されたことによって、駿山A遺跡群の遺物は、時期的な広がりを持つようになった。以下に主だった遺物について記述を行なう。

### 旧石器時代の遺物 (Fig. 11)

Fig. 11は、細石核である。漆黒の黒曜石剥片を素材とする。素材剥片に残された原礫面を除去するように石核下縁側からの片面調整剝離がおこなわれ、断面が楔形を呈す。打面には石核素材主要剝離面から加えられた横方向の連続する剝離面、それと一部の剝離作業面を切って正面からの長軸に沿う剝離面、さらに素材主要剝離面側に向り込んだ剝離作業面から加えられ、刃溝し状に重複する剝離痕が順に観察される。今回報告資料中に同種資料はほかにくまつた、製作された細刃器も含まれていない。打面を基準に長さ 2.8cm、高さ 3.0cm、幅 1.7cmを測る。

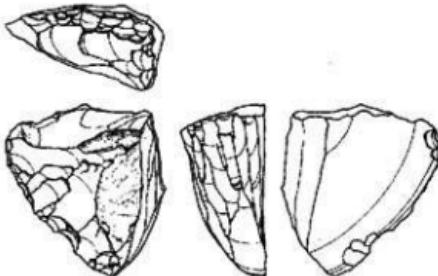


Fig. 11 細石核実測図(実大)

### 縄文時代の遺物 (Fig. 12-13)

土器 (Fig. 12 1~13) ほとんどが細片で、図化できる資料は少ない。時期は、縄文時代晩期初頭~前葉と思われる。精製土器(1~7)と粗製土器(8~13)に分けられ、量的には、後者の方が圧倒的に多い。

精製土器は、いずれも暗褐色~黒褐色を呈し、内外面ともに精致な磨研調整を施す浅鉢形土器である。1は、口径30cmを測る。口縁部はわずかに屈折しながら外に開く。内寄する頸部を介して、「く」の字型に屈曲する皿形の胴部に至る。口縁部文様帶の幅は狭く、内外面に一条の沈線をめぐらす。肩部の沈線は不明瞭で、段状にかすかに残る程度。2は、1に比べると頸部がやや短く、内弯の程度が強い。波状口縁と思われ、波頂部下の口縁、胴部屈曲部に凹点を付す。3は、口縁部が直立し、文様帶の幅もかなり狭い。口縁部文様帶外面と肩部に沈線を一条めぐらし、口縁内面には太目の凹線を施す。4と5は、直線的に外に開く胴部から直接口縁が立ち上がる器形と思われる。口縁内面に段を有し、4は口縁部文様帶に一条の沈線をめぐらす。6は、長めの口縁部がやや内寄しており胴部は明瞭な稜をなして、「く」の字型に屈曲する。7

は、直線的にのびた胸部から、短い口縁がわずかに屈折して、やや内弯しながら外に向く。内面には屈折部直下に細い沈線を一条めぐらす。

8～13は、深鉢形土器である。8～11は、黄褐色～淡赤褐色を呈し、焼成も良好である。いずれも、内外面ともに条痕を施した後、ていねいなナデ或いは、一部磨研調整を施す。8は胸部の形状は不明だが、「く」の字型に屈曲成いは、丸味をおびてふくらむと思われる。9は肩部に沈線を一条めぐらす。12・13は、胸部がわずかにふくらみ、そのまま底部に至る深鉢形土器と思われる、内外面に複雑なナデ調整を施す。

石器 (Fig. 13 14～24) 製品は少ないが、図示したもの以外に、多量の黒曜石剝片が出土した。これらの中には、縁辺に二次加工を施したものや、使用痕の認められるものもある。

14は玄武岩の偏平な原石を素材とし、縁辺にのみ粗い打割調整を加え、撥形に仕上げた打製石器である。現存長さ12.8cm、幅13.1cm、厚さ1.6cm。刃部は中央部がややくぼんでおり、裏面の刃部剥離面の稜線はかなり摩耗して、不明瞭になっている。15～17は石斧である。15は蛇紋岩製で、長さ12.7cm、幅5.5cm、厚さ3.8cm。基部の一部を除いて、かなり精致な研磨がほとんど全面に及ぶ。乳棒状を呈し、刃部は欠損しているが、恐らく両刃と思われる。16は頁岩の扁平な原石を素材とする。縁辺にのみ簡単な打割調整を加え、撥形に近い形状を呈する。刃部と基部の一部にのみ研磨痕が認められる。刃部は裏面は原石面をそのまま残しており、片刃である。長さ10.4cm、幅5.3cm、厚さ1.5cm。17は、蛇紋岩製のミニチュア磨製石斧と思われる。全面にわたってかなりていねいに磨き上げられており、断面はほぼ長方形を呈する。長さ3.9cm、幅1.9cm、厚さ0.8cm。実用品とは考え難い。

18～24は石鎌である。18～20は黒曜石、21～24はサヌカイト製。図示したもの以外に4点出土しているが、いずれも形状は多様である。19以外は、両面全面に細かな二次加工を施す。18は、両面中央部に研磨痕があり、平磨製石鎌と思われる。研磨痕はそれほど顕著でなく、剥離面の稜線がわずかに残る。長さ2.3cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm。19は、素材剝片の縁辺にのみ二次加工を施した剝片鎌。打面側が基部となり鍔形を呈する。長さ2.7cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm。20は両面にかなり細かな剥離調整を加え、両縁辺は鋸歯状を呈する。長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm。21は、両側辺中央付近に段を有し、縁辺は鋸歯状となる。長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm。22・23はそれぞれ平基式で、23は両側辺や上半部に段を有する。22は長さ2.8cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm。23は長さ2.7cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm。24は脚部の先端が平坦で幅広になっており、挟りはかなり小さく、申し分け程度に入っている。長さ2.6cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm。

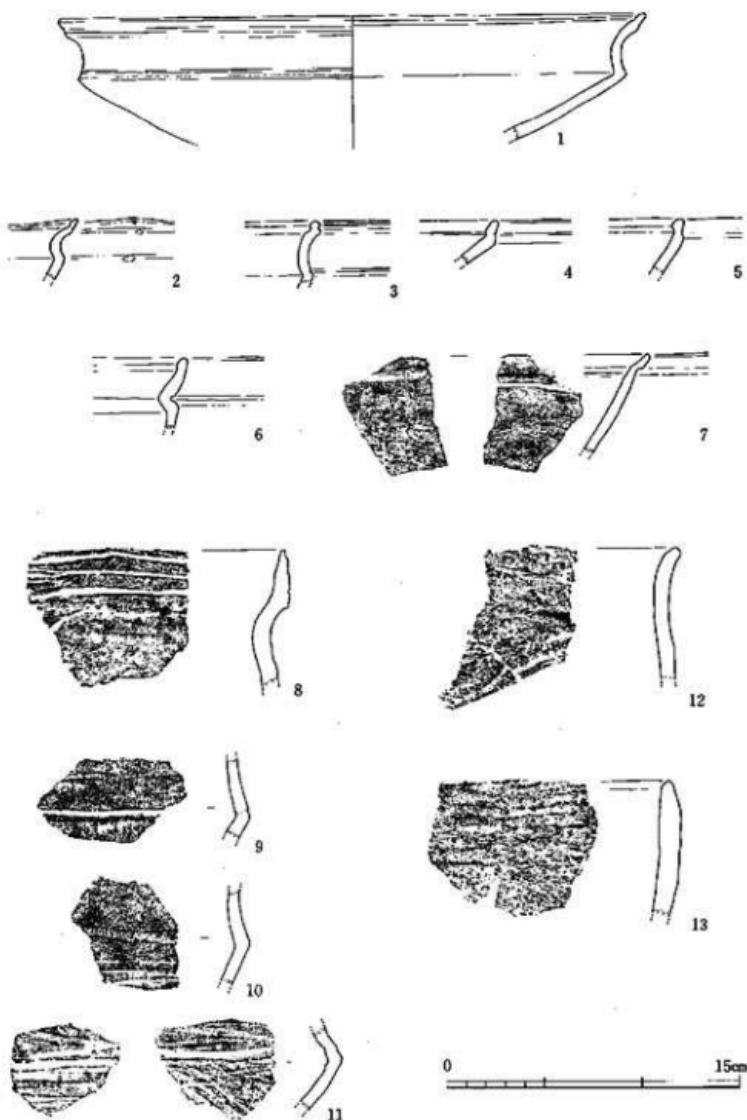
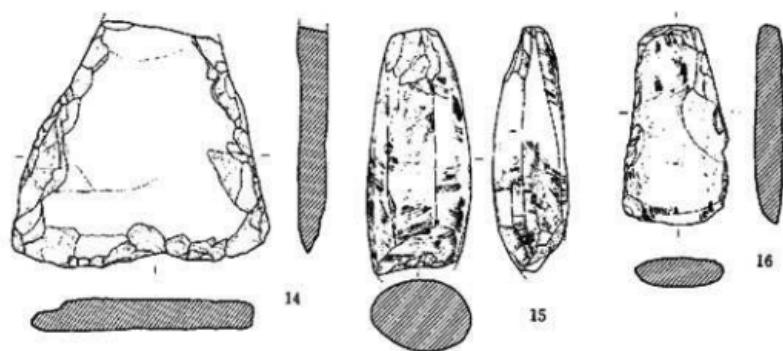
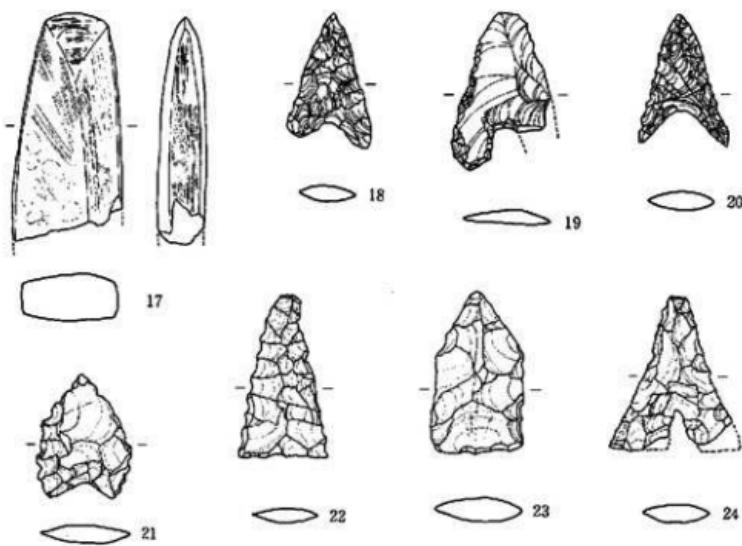


Fig. 12 編文時代の遺物実測図・土器(縮尺1/3) (1~5;8~13;4区, 6;5区, 7;T-15)



0 15cm



0 5cm

Fig.13 繩文時代の遺物実測図・石器(縮尺1/3、厚寸)  
(14-17;4区, 15;7区, 16;3区, 18-20;1区, 19-21～23;5区, 24;8区)

## 弥生時代の遺物 (Fig. 14)

弥生土器は5区に集中した分布が見られる。図化が可能な5点と表探資料の計6点について述べる。

25は、前期の壺形土器の肩部の破片である。羽状文が線刻されており、焼成はやや軟質である。

26は、中期初めの壺形土器の破片である。口縁部と胴部突帯に刻目が施されている。小片のため全周に囲むかどうか不明である。

27は、中期初めの壺形土器の破片である。口縁部に浅い刻目を配し、胴部突帯は横ナデ調整である。外面に二次焼成の痕跡がある。

28は、中期初めの壺形土器の破片である。口縁部と胴部突帯に3点の中、最も深い刻目が施されている。26~28の中では、口縁部が逆L字形に発達した28が最も新しい傾向が伺える。焼成は3点共にやや軟質である。

29は、前期の壺形土器の破片である。内外面とも表面が磨滅しており、調整が不明である。明黄灰色を呈し、軟質である。

30は、字川原田の排水路付近で表探された器台である。完形を呈し、暗茶褐色で焼成は堅緻である。外面はナデ調整が施され、内面はしばり痕が残る。器高は10.6cmを測るが、この種の小型の器台は、用途的には支脚に使用されたと推定されるものも少なくない。壺形土器の時期を上限として捉えたい。

弥生土器は、一次調査では出土しておらず、二次調査の新たな成果といえよう。該期の遺構検出が今後の課題である。

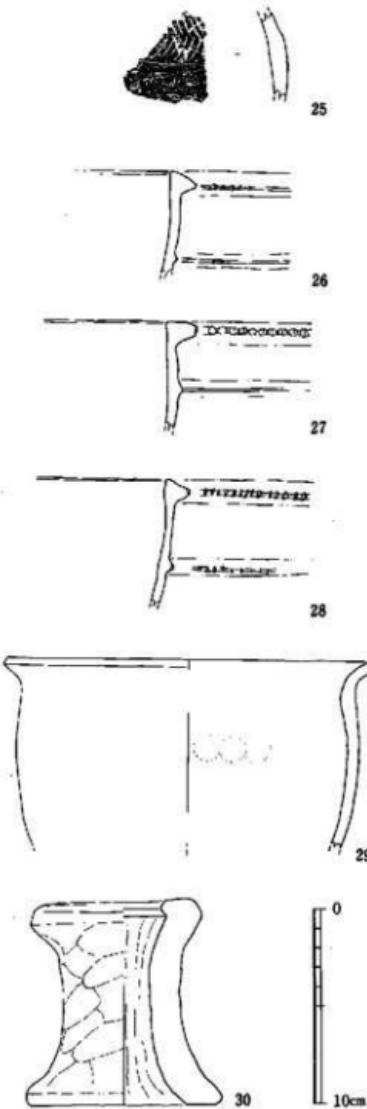


Fig. 14 弥生時代の遺物実測図(縮尺1/3)  
(1~5:5区, 6:表探)

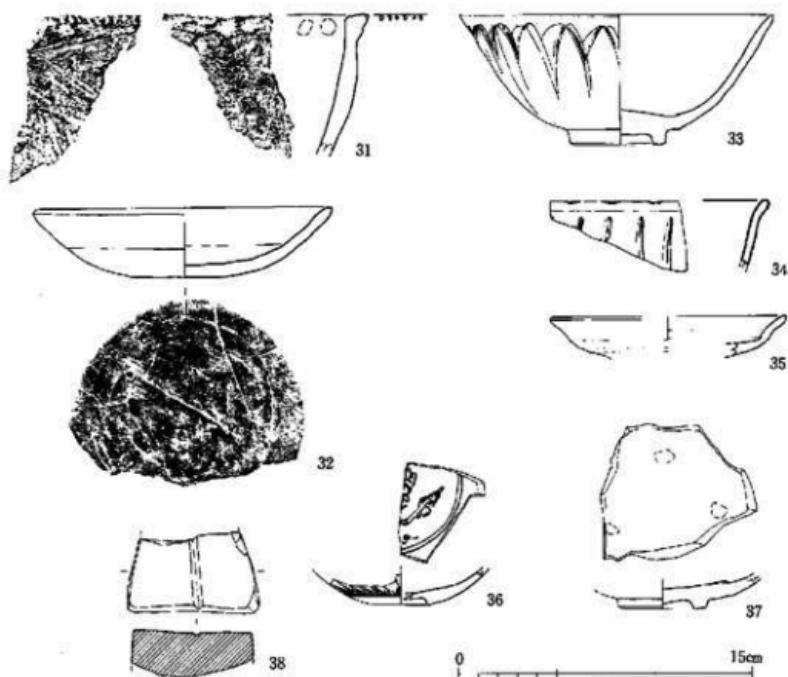


Fig. 15 その他の遺物実測図(縮尺1/3)  
 (31-37;表採, 32;I×, 33;3b×, 34;T-20, 35-38;5区, 36;T-5)

#### その他の遺物 (Fig. 15)

31は、縄文晩期の粗製深鉢形土器の口縁部と思われる。小片で、赤褐色を呈し、焼成は堅緻であるなど、本遺跡の他の縄文土器と異なる特徴をもつ。外面は粗い斜方向のナデが施され、口縁端部には刻目文が回っている。

32は古代の土師器の壺である。全体の3分の2程を存す。口径は15.5cmを測り、底部は箝切りがなされている。

33・34・35は青磁である。33は龍泉窯系鍋蓮弁文の碗である。口径16.2cm、器高 6.7cm、高台径 5.0cmを測る。全面にローリングをうけていることから上流から流れ込んできた可能性がつよい。34は、碗の破片で、蓮弁が簡略化されたタイプである。35は皿の小片で、復元口径は12cmを測る。36は明代の染付皿で、内底部に草花文、外側に芭蕉文が回っている。37は白磁碗の底部であるが、白濁した釉調から李朝の可能性がある。

38は砂岩製の砥石の破片である。現存する四面と溝状に磨んだ使用部がある。時期は不明。

## 第5章 第3次調査の報告

### 1. 第3次調査の概要

本調査は、県営圃場整備事業に伴うものである。昭和63年度の事業対象地区は61年度の対象地区の南側に位置する。早良区大字脇山字広田、字会田に所在する。当該地は椎原川東岸の、背振山系の金山山塊より小笠木川の氾濫原に向かって伸びた二つの丘陵端部と、その中央および東側の谷部にあたる。田面の最高所は東側丘陵部で82.03mを測る。調査前は水田であった。

調査に先立ち、昭和63年8月1日より9月14日まで試掘調査を行った。その結果、農政側と協議調整を行い、調査対象地を恒久的構造物、切り土施工を行う田面および耕作土の直ぐ下に遺構が存在する田面に対して調査を実施することになった。

昭和63年9月19日より12月15日まで本調査を行った。

### 2. 試掘調査の成果

第一次および第二次調査の状況から、あらかじめ遺跡が存在する可能性のない谷部を除き、各田面に試掘を実施した。原則的には各田面に一ヵ所は試掘を行い、比較的広い田面に対しては等高線と平行に、狭い田面が続く場合には等高線に対して直角に試掘トレンチを設定した。

その結果、東側丘陵の最高所を除き、水田基盤土直下で巨礫層が検出され遺構のないことが判明した。試掘調査の結果を受けて、南東部の台地上にあたる水田3面に調査区を設定した。各田面の標高は約81mを測る。

### 3. 遺構と遺物

水田耕作土直下の厚さ10~20cmの灰色土には、縄文後晩期の土器片、中世の輸入陶磁器片等若干の遺物を含んでいるが、わずかながら近世陶磁器細片を出土するので、近世以降の所産であることが考えられる。

層位は表土直下で、厚さ10~20cmの粗砂を含む灰色土層の水田基盤土が現れる。遺構面は水田基盤土直下にある。上から黒褐色土、橙褐色土、黄褐色砂質土の堆積がある。その下は巨礫層である。

遺構は、焼土塙38基、溝7条、大型の土塙状遺構1基、焼土面1、多数のピット群を検出した。

このうち、ピット群に関してはまとまりを見せるものもなく、年代を決定できるだけの遺物の出土もないため、ここでは取り扱わない。

以下の遺構について説明する。

#### 溝

近世の溝7条は全て等高線に並走する。水田区画の地割り溝である。いづれも埋土は灰色土である。現存する幅は約20~50cm、最深部で深さ約20cmを測る。

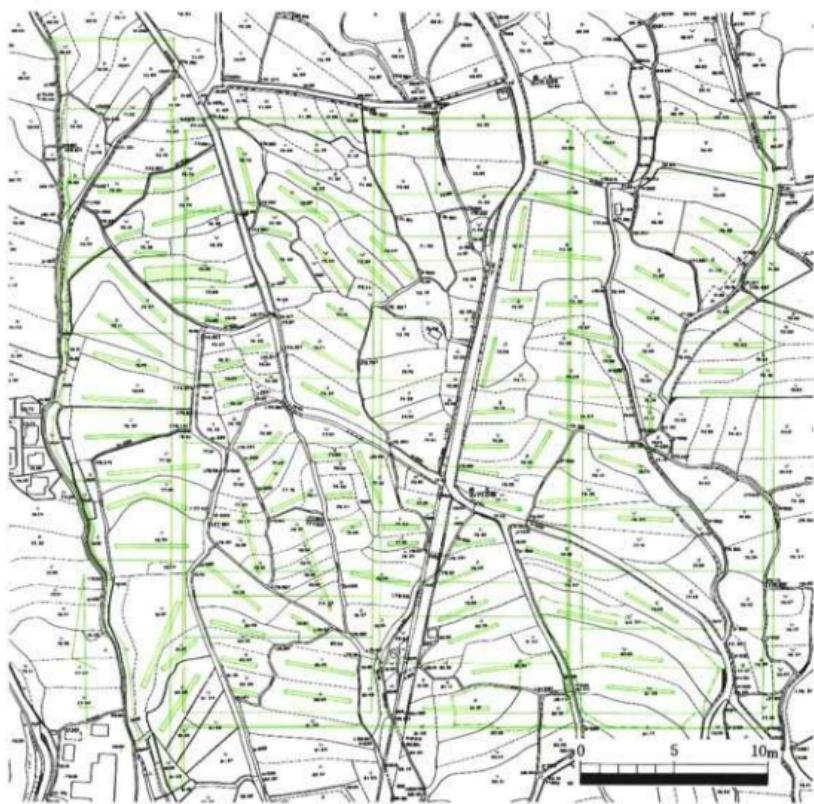


Fig.16 3次調査の範囲と調査区の位置図(縮尺1/3,000)

□は試掘トレンチ、又は調査範囲を示す。

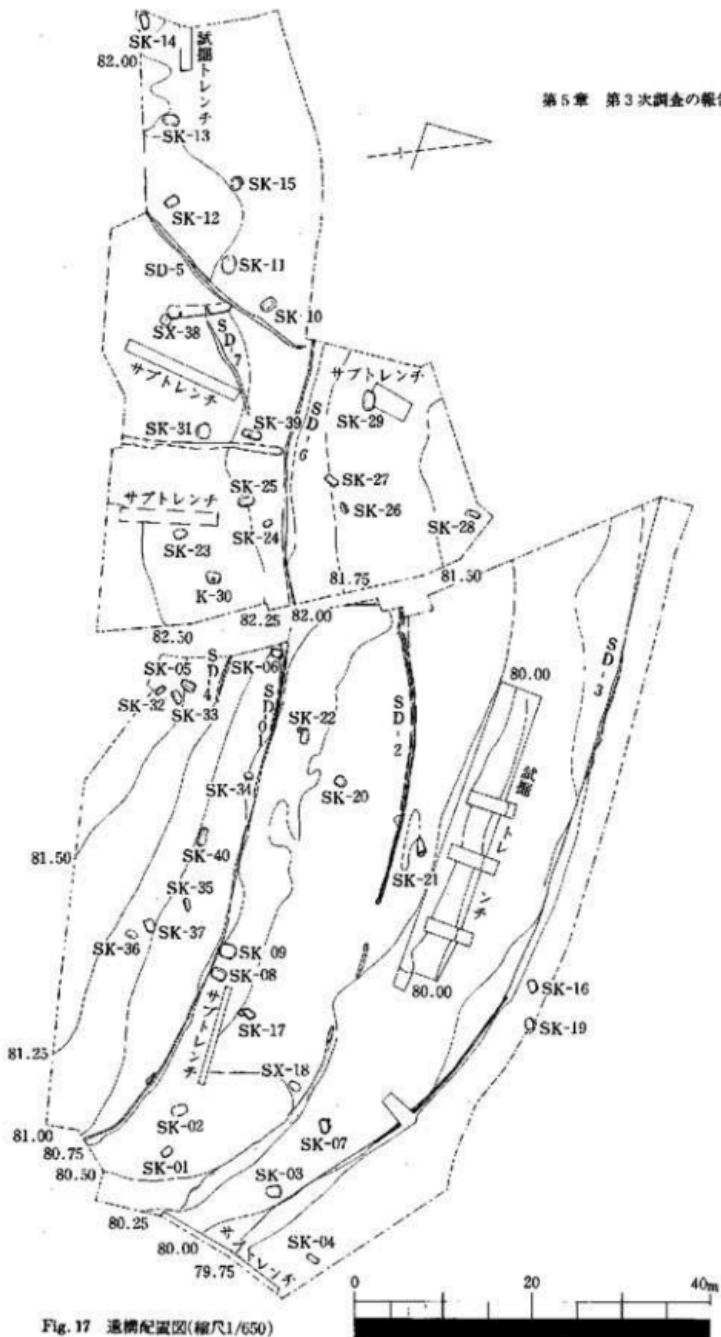


Fig. 17 透構配図(縮尺1/650)

このうち SD-1,3,5,6は途絶しながらではあるが、現在の水田区画とほぼ一致して走る。

一方 SD-2,7は現区画と一致せず、現存長もそれぞれ約14m、6mを測り比較的短く完結する。また SD-4は部分的に遺存するのみである。

以上の事実から前者4条を整地以前より現在まで継続する地割り溝、後者3条を整地後消滅した地割り溝と考えたい。

#### 焼土塀

一般に焼土塀という名称は、焼土面が存在するものを差す場合が多い。ここでは、埋め土中に炭化物、焼土粒が含まれるもの焼土塀とした。

焼土塀の平面形は隅丸方形、長方形、楕円形、不整楕円形、不整円形、不整形を呈する。隅丸長方形がもっとも多く、17例を数える。検出時のプランは焼土壁の崩落、破壊により、本来の姿を必ずしも残していない。

焼土塀の床面は一部礫層に達するものがある。SK-01-05では、床面コーナー部分で小ピットを検出した。焼土塀の性格を知る上で、今後注意すべきである。

焼土塀の分布は調査区内において著しい偏りを見せず、主軸方向も規則性を持たない。また、掘削する場合も地山面の掘りやすさを必ずしも考慮していない。

焼土塀の平面形、規模、焼土面の位置でこれらの遺構の性格を考えてみる。平面形は隅丸長方形、楕円形、長方形、不整円形、不整形等があるが、隅丸長方形、楕円形が大半を占める。規模は長さ1~1.5mが14基、1.5~2.0mが19基、2.0m以上が5基となる。しかし、平面形・

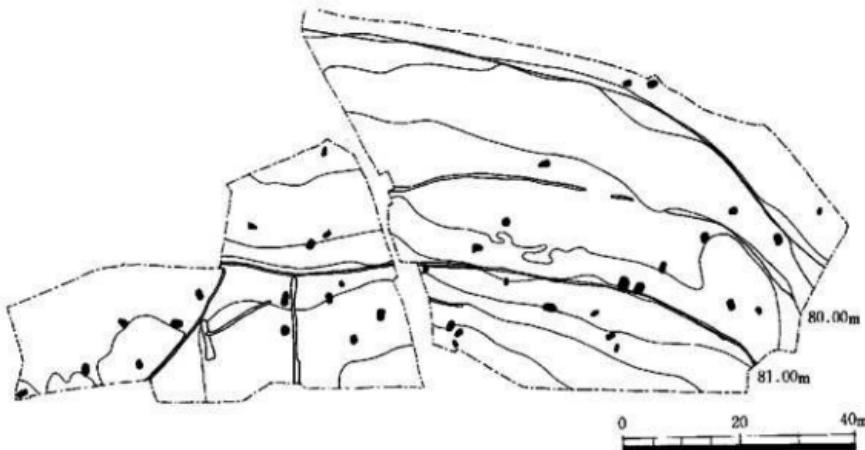


Fig.18 燃土塀分布図(縮尺1/800)・燃土塀を黒ベタで表わした

規模については焼土塙の性格の違いを示すものではないと考える。一方、焼土面の位置は二大別でき、側面のみに認められるもの（SK-1、2、4、7、9、10、11、12、13、14、17、20、21、24、26、27、28、29、32、36、37、39、40）と側面と底面に認められるもの（SK-3、6、8、19、23、25、30）がある。このような相違が表れる原因としては、つまり、土塙の底にまで、火が及ぶ、及ばないという土塙内での焼成方法の違いが考えられる。このことは焼土塙の性格を考える上で重要な意味を持つと言える。

#### 大型土塙

SK-38は長さ約7.1m、最大幅約0.7mを測る。残存する深さは10cm前後と残りは悪いが、埋め土中に炭化物を多く含み、焼土塙と同じような用途を想定できる。

#### 焼土面

SK-18は固く焼き縮まった不定形な焼土面である。長軸約1m、短軸約0.4mを測る。外側1.4m×0.8mにかけて、熱を受けたために変色したと思われる暗紫褐色土が広がる。

tab. 2 土坡一覧表

連続番号	堆積番号	回収番号	平面形	規模(長さ×幅×深さ cm)	方位	焼土面の位置	堆土の状況
SK-01	Frig.19	PL.12	隅丸長方形	125 × 83 × 24	N30°W	側面	炭化物層がある
02	19	12	隅丸長方形	175 × 115 × 31	N12°W	側面	炭化物層がある
03	19	—	楕円形	175 × 135 × 29	N 5°W	側面と底面	炭まじり
04	19	—	隅丸長方形	154 × 68 × 25	N39°E	側面	炭まじり
05	19	12	長方形	170 × 96 × 28	N40°E	なし	炭まじり
06	19	—	隅丸長方形	(127) × 86 × 35	N18°W	側面と底面	炭まじり
07	19	—	隅丸長方形	163 × 95 × 27	N82°E	側面	炭まじり
08	20	—	楕円形	188 × 138 × 56	N37°E	側面と底面	炭化物層がある
09	20	12	隅丸長方形	190 × 157 × 25	N26°E	側面	炭まじり
10	20	—	隅丸長方形	170 × 117 × 30	N18°W	側面	炭まじり
11	20	13	不整梢円形	211 × 150 × 42	N71°W	側面	炭化物層がある
12	20	13	長方形	150 × 108 × 32	N17°W	側面	炭まじり
13	20	—	隅丸長方形	178 × 120 × 23	N 7°E	側面	炭まじり
14	21	13	長方形	180 × 88 × 31	N83°E	側面	炭化物層がある
15	21	—	隅丸長方形	127 × 95 × 31	N19°W	なし	炭まじり
16	21	—	不整形	145 × 98 × 15	N72°E	なし	
17	21	13	不整形	130 × 89 × 40	N56°E	側面	炭まじり
SX-18	21	—	楕円形	135 × 76 —	N50°E	—	—
SK-19	21	—	隅丸長方形	123 × 90 × 22	N85°E	側面と底面	炭まじり
20	21	—	不整梢円形	135 × 113 × 44	N49°E	側面	炭まじり
21	22	—	隅丸長方形	211 × 87 × 50	N86°E	側面	炭まじり
22	22	—	隅丸長方形	173 × 84 × 37	N67°W	なし	
23	22	—	不整梢円形	145 × 110 × 7	N 4°W	側面と底面	炭まじり
24	22	—	不整梢円形	100 × 70 × 10	N27°W	側面	炭まじり
25	22	14	楕円形	194 × 101 × 58	N 3°W	側面と底面	炭まじり
26	22	—	楕円形	128 × 55 × 15	N70°E	側面	炭まじり
27	22	—	楕円形	165 × 85 × 25	N59°E	側面	炭まじり
28	22	—	不整形	170 × 60 × 35	N46°E	側面	炭まじり
29	23	—	長方形	218 × (128) × 20	N58°W	側面	炭まじり
30	23	—	隅丸長方形	178 × 145 × 12	N18°E	側面と底面	炭まじり、焼土まじり
31	23	—	不整円形	177 × 156 × 35	N36°W	なし	炭まじり
32	23	14	長方形	118 × 55 × 17	N30°W	側面	炭まじり
33	23	14	隅丸長方形	153 × 82 × 33	N75°E	なし	
34	23	14	楕円形	107 × 75 × 30	N19°E	なし	炭まじり
35	23	15	不整梢円形	140 × 68 × 17	N73°E	なし	炭まじり
36	24	—	隅丸長方形	126 × 72 × 28	N29°E	側面	炭まじり
37	24	—	不整長方形	150 × 85 × 30	N70°E	側面	炭まじり
38	24	15	長方形	710 × 122 × 10	N 1°W	なし	炭まじり
39	24	15	隅丸長方形	223 × 84 × 43	N14°E	側面	炭まじり
40	24	—	不整形	225 × 90 × 15	N73°W	側面	炭まじり、焼土まじり

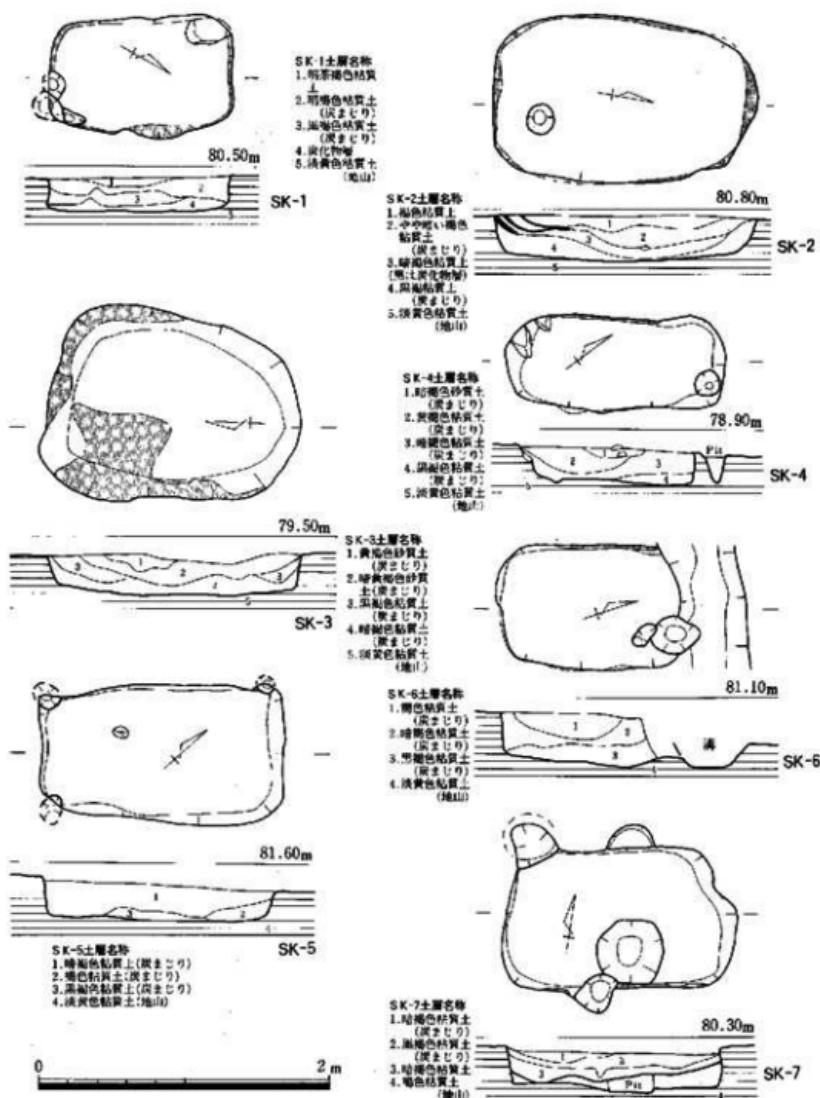


Fig. 19 透構実測図SK-1~7(縮尺1/40)

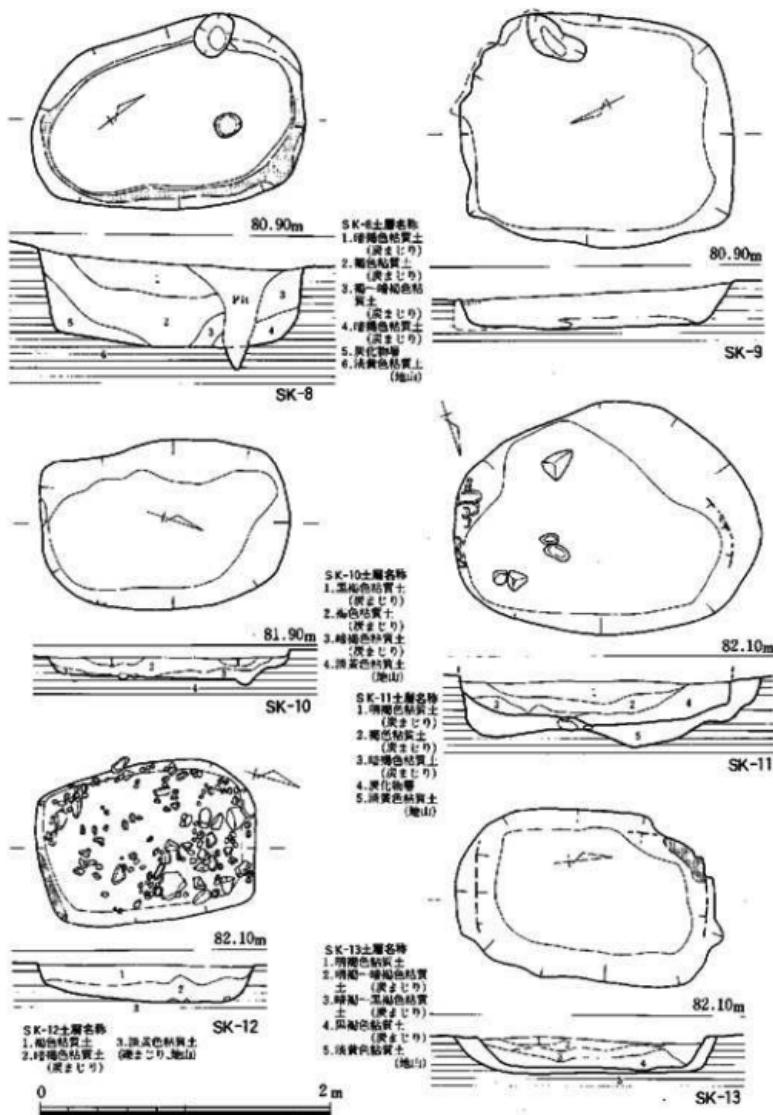


Fig. 20 連構実測図SK-8~13(縮尺1/40)

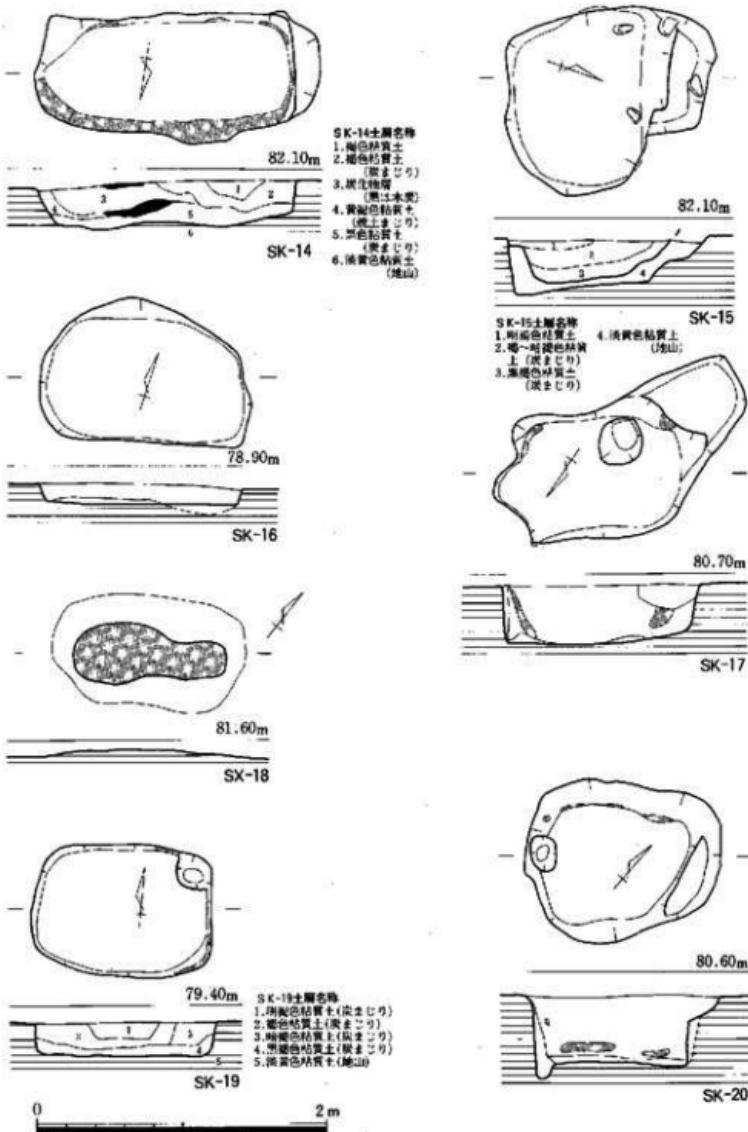


Fig. 21 造構実測図 SK-14~17·19·20, SX-18(縮尺1/40)

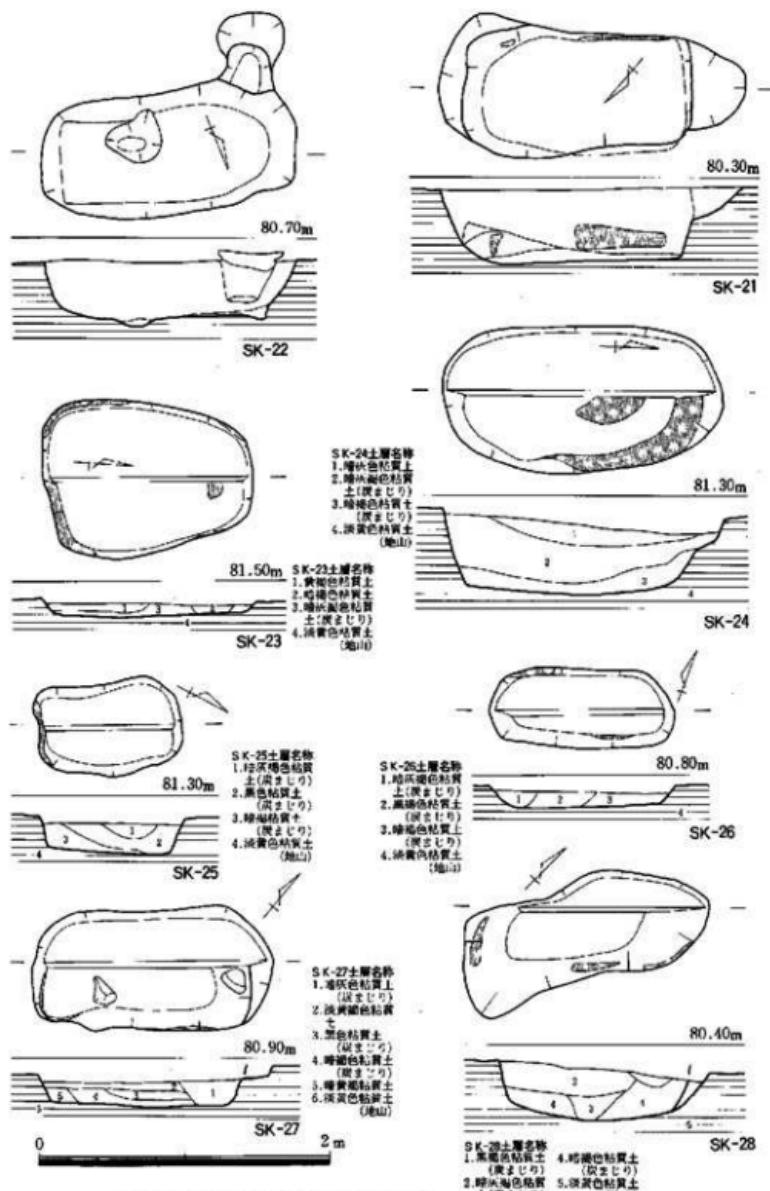


Fig. 22 造構実測図 SK-21~28(縮尺1/40)

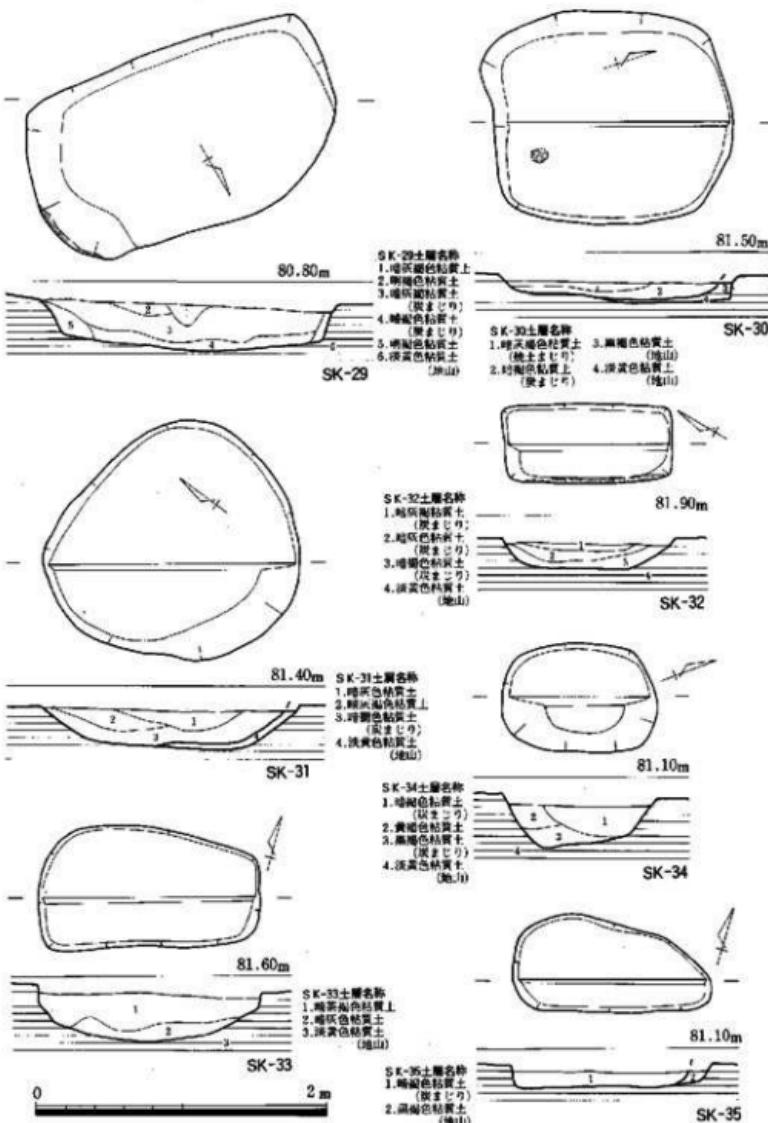


Fig. 23 造構大測図SK-29～35(縮尺1/40)

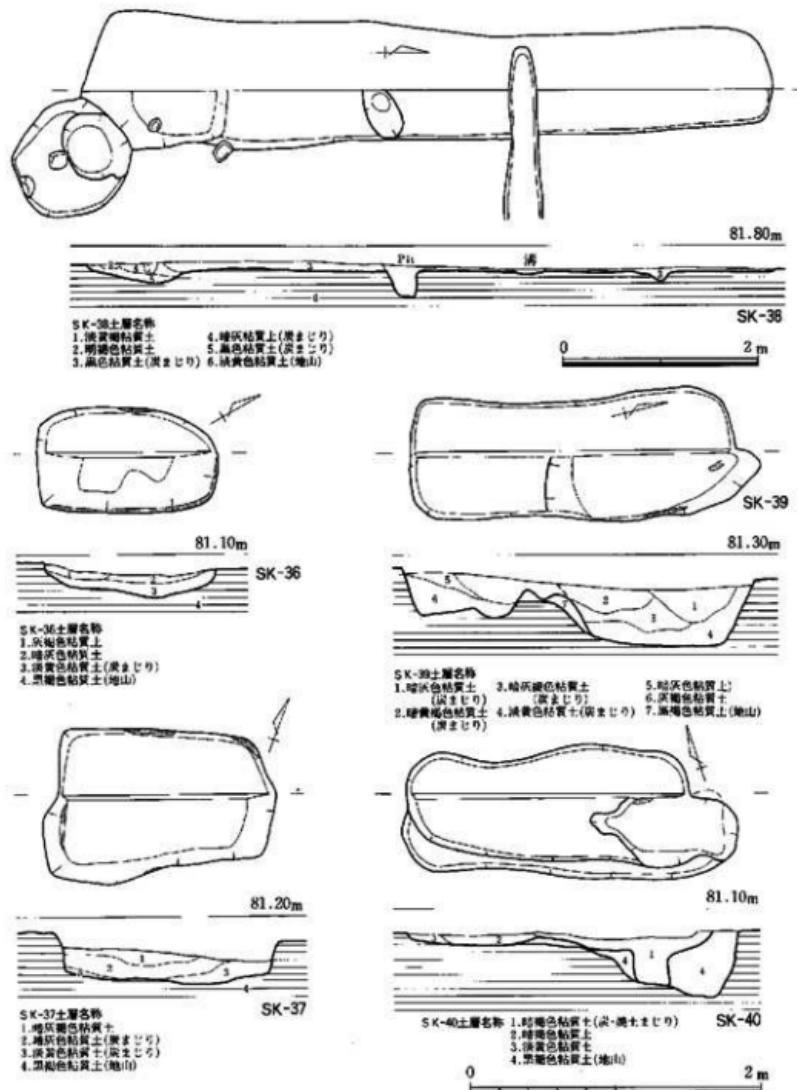


Fig. 24 透構実測図SK-37~40(縮尺1/60,1/40)

## 遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナ4箱である。遺物の大半は遺構面で検出したもので、土塙やピットからのものは僅かである。出土遺物には縄文晩期前半期の土器、石器、石斧等があり、遺物の大半を占める。その他に中・近世の土師器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器等もあるが、細片ばかりで図示できるものはほとんどない。

1~16は遺構出土の遺物である(Fig. 25)。1~7、10~12はSK-2出土のものである。1~5は精製の浅鉢で、口縁端部を上方に拡張させるものや内面に沈線・段を持つものがある。7は浅鉢の胴部片で、外面にヘラ描きの斜行沈線をもつ。6は粗製の深鉢である。10は両側縁に使用痕がある縦長削片である。石材は黒曜石である。11、12は凹基式の石鎌で、11は抉りは深い。11の石材は安山岩、12は黒曜石である。8、9は口縁端部を上方に拡張させ、外面に沈線を施す精製の浅鉢である。8はSX-125、9はSX-229出土である。13は凹基式の石鎌で、先端が欠損している。石材は安山岩である。SX-280出土である。14~16はSX-290出土である。14は側縁の一方に使用痕のある削片である。表面には自然面を残す。石材は黒曜石である。15はスクレーバーで基部は欠損している。石材は安山岩である。

17~49は遺構面出土の遺物である(Fig. 26・27)。17~30は精製の浅鉢である。17、19は波状口縁を呈する。18は口縁端部に鱗状の突起をもつ。20~24は口縁端部を上方に拡張させ、外面に沈線を施すものである。20は頭部の二箇所に穿孔をもつ。25~28は口縁端部に浅い段を施すものである。29は口縁外面に沈線による直線と弧文を施す。滋賀里式系の土器と考えられる。31~34は深鉢で、31は波状口縁を呈する。35は瓦器である。器面の風化が著しく、調整は不明である。口径9.8cm、器高2.0cmを測る。36~47は石鎌である。36は凹基式で抉りは深く、二等辺三角形を呈する。37は凹基式で抉りは深く、正三角形を呈する。38は平基式で二等辺三角形を呈する。39、40は凹基式で、側縁が内弯して先端に至る。41~46は凹基式で、抉りは浅い。平面形は二等辺三角形を呈するが、45、46はやや縦長である。47は未製品で、表面に自然面を残す。石材は37、40は黒曜石で、他は安山岩である。48はドリルで、縦長削片を使用し、縁辺に調整を施して先端部を形成する。石材は黒曜石である。49は打製石斧で、基部は欠損している。石材は結晶片岩である。

50~53は試掘調査で出土した遺物である(Fig. 28)。50、51はB-5トレンチ出土である。50は粗製の深鉢である。口縁は緩やかに外反し、波状口縁を呈する。51は精製の浅鉢で、頭部で屈曲して、外反気味の口頭部がつく。頭部中位には沈線が巡る。底部外面には二次焼成の痕跡が認められる。頭部の屈曲部から上は岡上復元である。52は三稜尖頭器である。素材に横長削片を使用し、二側辺の腹面側と稜上から調整削離を施す。基部には自然面を残す。石材は黒曜石である。A-12トレンチ出土である。53は撥形を早する磨製石器である。上端が欠損しているため、全形を知りえないが、磨製石剣の柄の可能性もある。C-7トレンチの出土である。

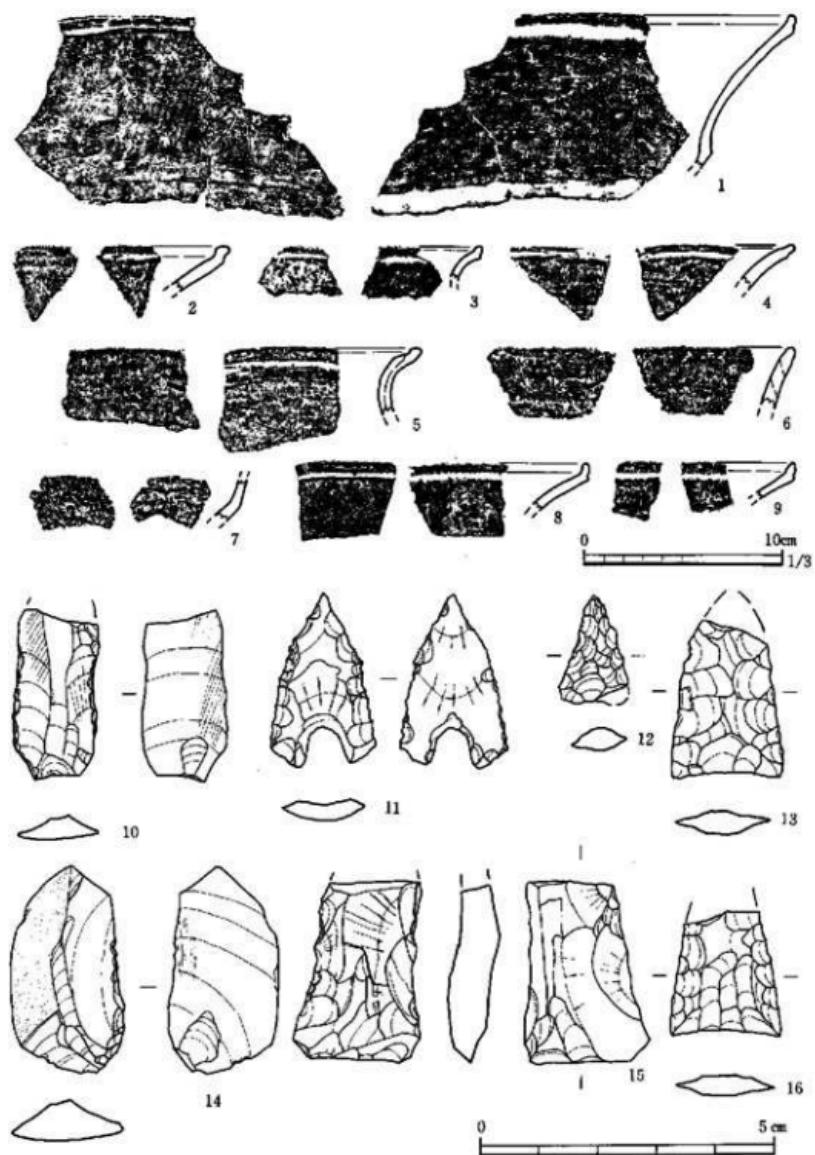


Fig. 25 遺物実測図縮尺1/3, 1/1)

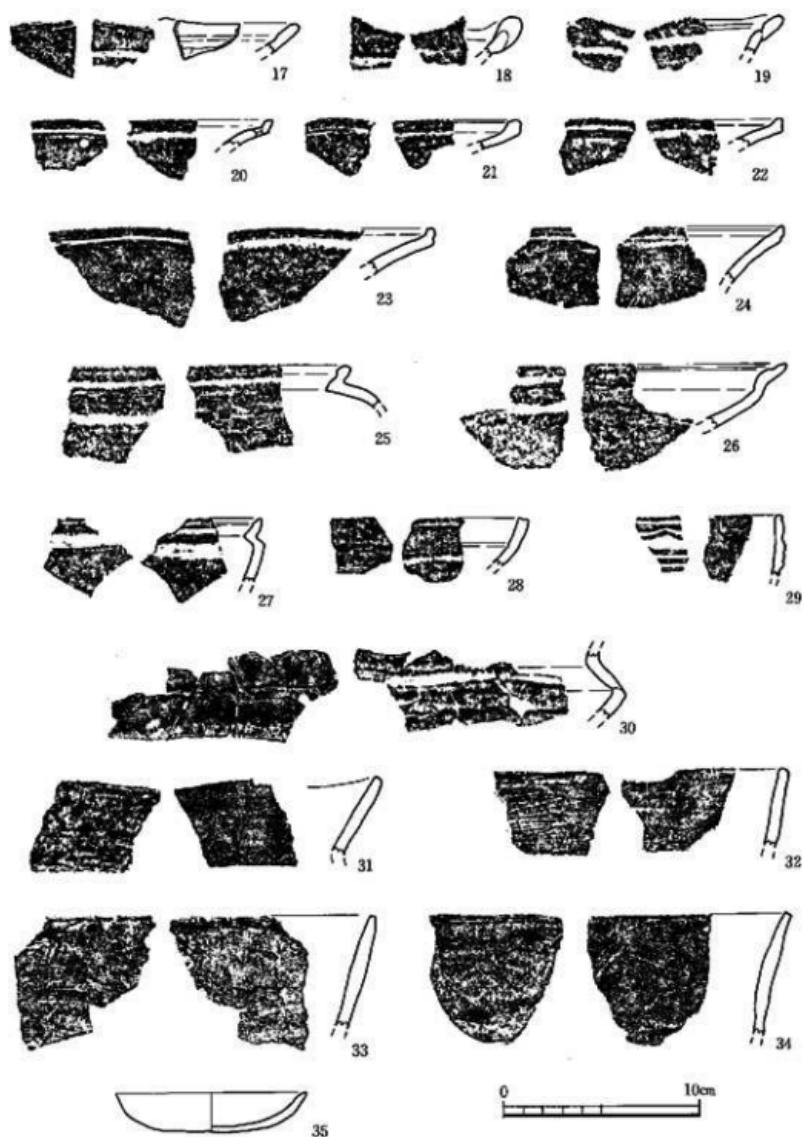


Fig. 26 遺物実測図(縮尺1/3)

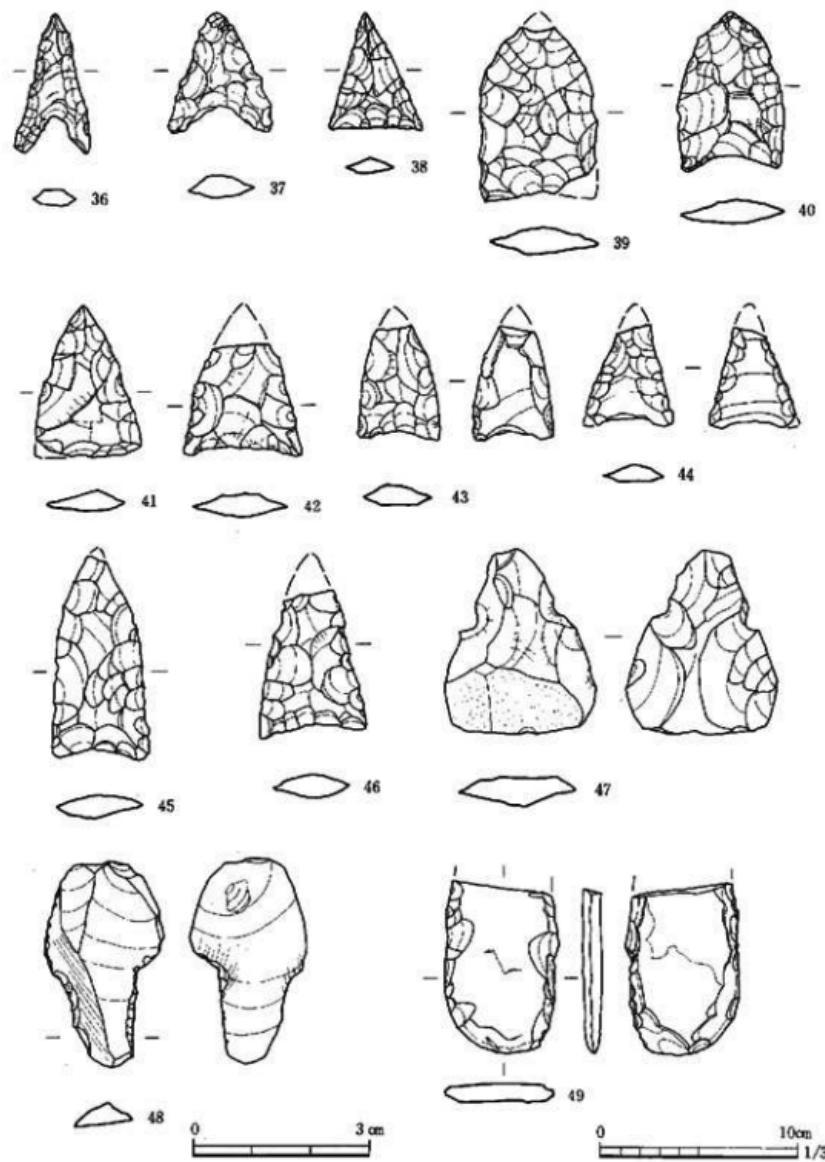


Fig. 27 造物実測図(縮尺1/3, 1/1)

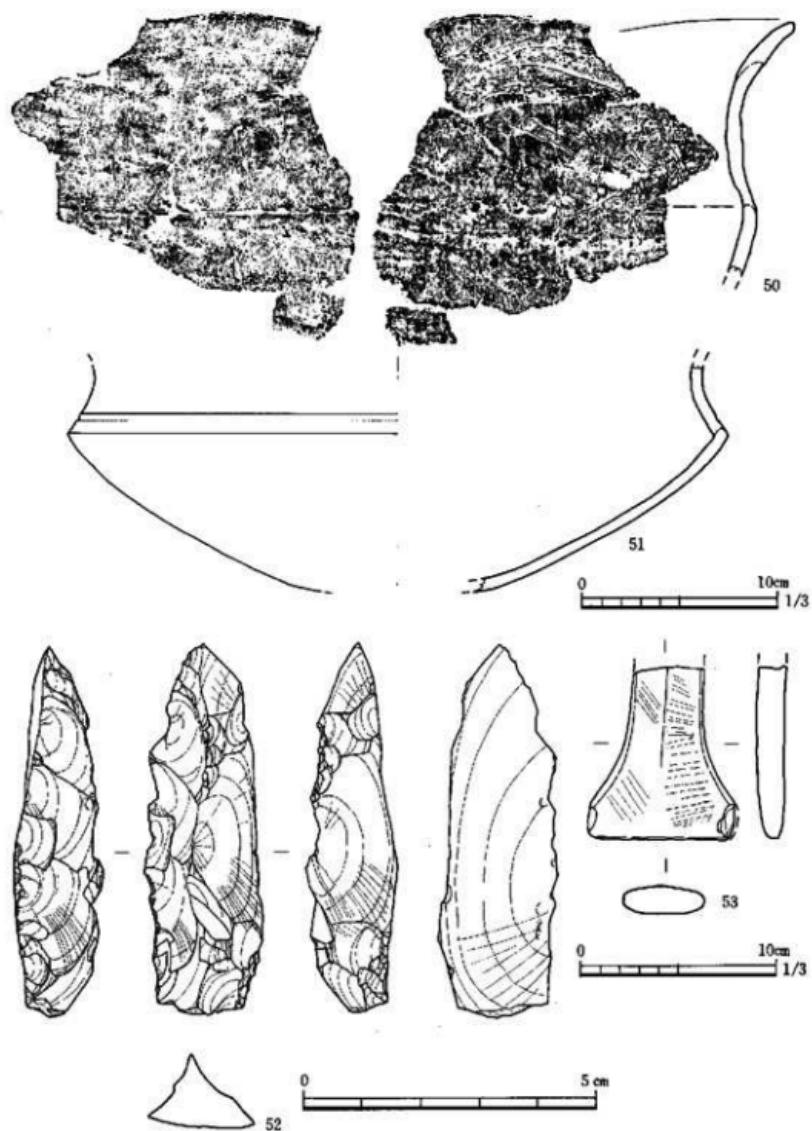


Fig. 28 造物実測図(縮尺1/3, 1/1)

#### 4.まとめ

第3次調査の成果として脇山会田地区の開発過程に関する点があげられよう。本来、調査地点は丘陵尾根上の緩斜面であったと考えられる。三層の堆積土が順次露出する状況は、これらが形成された後、削平を受けたことを示している。このうち黒褐色土中には中世の遺物が含まれており、中世整地層の可能性がある。以上から堆積層の最終的な時期を中世のある時期と考えたい。したがって当該地域における削平を伴う開発も同様に中世以降であろう。試掘結果でも述べたように、水田基盤土に見られる耕地整備は18c以降に行われているが、地割り溝の状況から、それ以前に耕地、おそらくは水田が存在したことは確実である。現在調査が進められている掘溝によって丘陵上ではじめて灌漑が行われたのであるとするならば、大規模な水田開発の時期を中世に求めることは妥当である。

一方、焼上塙の時期であるが、各遺構が削平を受けているため、農地開発に先行すると見てよい。

焼土塙の性格は従来、火葬遺構、あるいは単に炉跡として考えられてきた。今回の調査では遺構内に骨粉が認められず、火葬にかかる遺構の可能性は薄いと思われる。また土層断面の観察から、炭化物を故意に除去したと思われるような掘り込みの存在、二層以上の炭化物層があり、複数回の使用を想定し得ることなどから、なんらかの焼成にかかるものと考えたい。上部構造の有無も含めて不明である。このため機能を限定することは不可能であるが、炭化物の除去がそれ自体の生産を目的としたことは充分に考え得ることである。前述の通り、焼土塙は農地開発前の所産である。それ以前の景観は森林、ないしは原野と考えられる。したがって、開墾のための伐採にせよ、生産を目的とした伐採であるにせよ、燃料は豊富に存在する。ここでは農地開発以前のあり方として、この燃料を使用しての、たとえば木炭、草木灰等の生産の可能性を指摘しておきたい。

今回は丘陵先端部の調査を行った。遺構面、整地面から旧石器である三稜尖頭器をはじめ、多数の縄文後晩期および、中世遺物の出土をみた。これらはあまりローリングをうけていないことから、今後調査が丘陵部に進むにしたがい、当該期の遺構が検出される可能性が高い。圃場整備事業は残り4ヶ年が予定されている。これから脇山A遺跡の旧石器時代、縄文時代、中世遺跡の姿が次第に明確にされるであろう期待をもって第3次調査のまとめとしたい。

## 第6章 第4次調査の概要(谷口地区)

### 1. 調査に至る経緯

1989年度の脇山地区県営開拓整備事業は、脇山字谷口・字会田の2工区が計画されている。両工区の計画面積は14.4haである。今回、概要について報告する谷口遺跡は、谷口地区的開拓整備事業に伴うもので、計画面積は5.6haである。当該地は文献等によれば、熊野比丘尼が貞觀年間(627-645)に樋溝を拓き、水田開発を行ったという伝承が残っており、谷口集落の南側の小高い山上に比丘尼の碑が残っている。中世の名についての史料も残っており、水田開発を物語る遺跡の存在が予想された。試掘調査は5月より開始し、地形の傾斜面に沿ってトレンチを設けた。

その結果、古代から中世の遺物、遺構を検出したが、当初の調査対象面積が約3haに及ぶため、県・市の農政と協議を行い、盛土保存による設計変更によって調査対象面積を約2.3haに縮少した。本調査は永久構造物と切土施工の田面に限って実施した。本調査は7月に開始した。

### 2. 立地と環境

当該地は、背振山系より北流する椎原川右岸の段丘上に位置する。標高約128mから106mという傾斜地形を形成しており、石垣によって区画された水田が築かれている。この水田地帯の中央には谷部が存在し、樋溝が設けられている。この溝は椎原川から引かれた灌漑用水で、下流の広範な地域を潤している。現在の水田の景観は、幾代にも及ぶ水田開発の苦闘の歴史を想わせる。

脇山は、原始以来、山岳信仰の中心である背振山の北麓にあたり、関連する地名、伝承が多く残されている。又、耕地の開発や小領主層勢力の動向等を知る手掛りとしての文献も残っている。それによれば当該地周辺は「蘿名館」に比定されており、長錄4年(1459年)にはこの付近が水田として開発されていたことがわかる。最近の研究では樋溝はこの頃まで築かれていたとみられている。このように谷口遺跡は、中世以降の耕地開発の在り方を知る上で、地域史上興味深く、本調査の主眼もそこにおいた。

### 3. 遺構と遺物

検出した遺構には、旧道や、水田、畠、石垣、地割り溝、焼土塙、土塙がある。旧道は板壁時に毛るもので、15世紀から近世に築かれ、現在でも一部使用されている。石垣の裏込めからは明代の青磁などの輸入陶磁器が出土しており、開発領主層の存在が想定できる。地割り溝や段落ちは斜面に直交しており、これは、以前小区画されていた水田の痕跡と考えられ、現在の石垣によって大きく区画された水田を作るまでの過程を知ることができる。焼土塙は、大略0.7×2mを測り、平面形は長方形を呈するものが多い。壁面が焼けており、床面には木炭層が堆積する。遺物は少なく、糸切りの土師皿等が出土しているにすぎない。遺物には、楕円押型文土器、阿高系土器、黒色磨研土器、石鎚等の縄文時代の遺物が出土している。

(注) 吉良国光「背振山の所領支配と村落一統前国早良郡脇山を中心として」(『九州史学』特集号)1987年

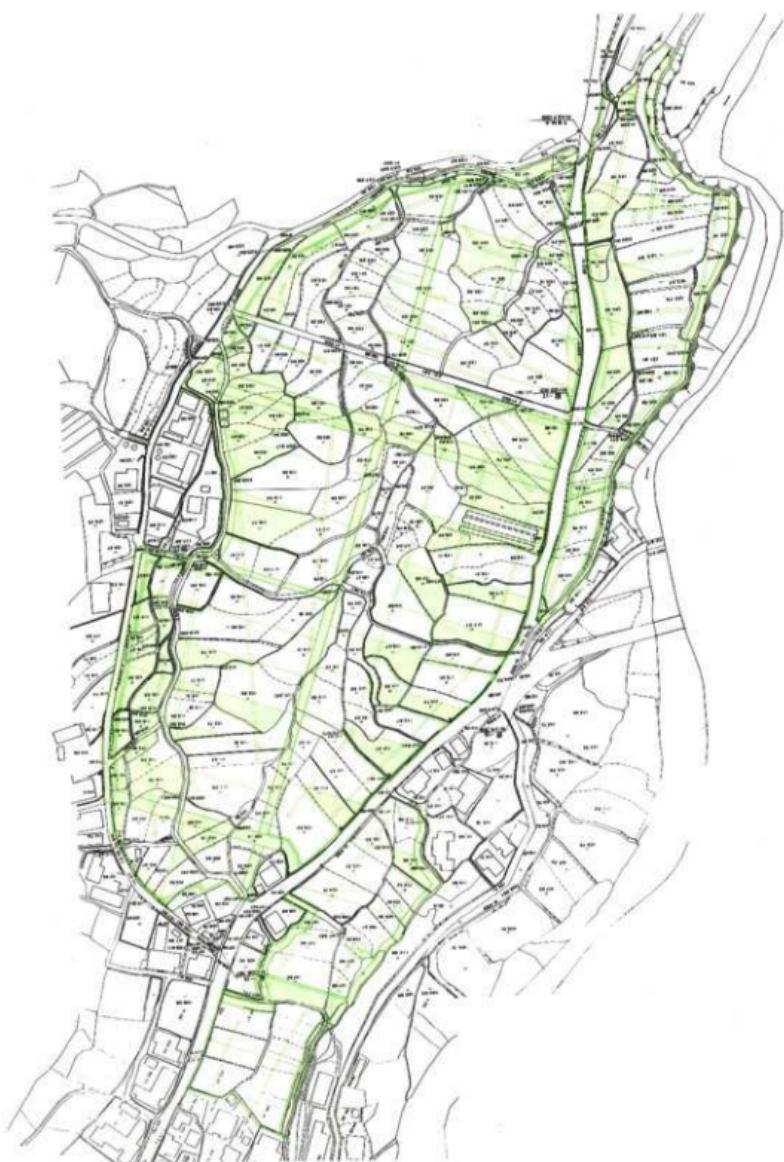


Fig. 29 4次調査の範囲と調査地区の設定・谷口地区(縮尺1/2,000)

## (会田地区)

## 1. 調査に至る経緯

平成元年度の脇山地区圃場整備事業に伴うもので、この内、会田地区の約8.76haが対象地である。発掘調査に先立って試掘調査を実施した結果、ほぼ全城に遺構の存在が認められたため県・市の農政担当者、並びに地元の圃場整備組合の役員と協議を行った。その結果、現状変更をしない田面や盛土施工の田面を増すなどの設計変更によって発掘調査対象地を絞り込んだ。調査対象面積は構造物5,532m<sup>2</sup>、田面部分8,523m<sup>2</sup>である。本調査は平成元年11月から開始し、平成2年2月3日に終了予定である。

## 2. 立地と環境

脇振山の東側山麓は小笠木川や椎原川の開析による狭い谷地形を形成するが、当該地は、椎原川右岸の扇状地形上に位置し、地形の傾斜は著しい。台地の先端には小笠木川が流下している。当該地の中央部分には数条の小河川が存在し、小笠木川へ注いでいる。福岡市文化財分布地図では脇山A遺跡の中に該当しており、文書資料では、土地開発や中世小領主層の存在などを裏付ける文献史料や、荒平城落城にまつわる伝承も數多く残っている。

## 3. 遺構と遺物

基盤は礫層が存在し、その直上の上層には硬質の黒褐色粘質土、その上層に軟質の黄褐色粘質土が存在する。これらは堆積土である。中世の整地層としては部分的に暗灰色粘質土が存在する。

遺構の時代・時期は绳文時代晚期、弥生時代前期、中世（12～15世紀）に限られている。绳文時代は土塙を検出した。平面形が円形又は梢円形で、断面形は袋状を呈している。直径は60～80cm、深さは40～100cmである。遺物は非常に少ない。中世の遺構には生産遺構として焼土塙がある。これらは隅丸長方形、不整円形の2種類の形態がみられ、更に大・小に分類できる。壁が焼けているものが多く、木炭の厚い堆積をもった土塙も存在した。生活遺構には掘立柱建物や竪穴住居状の一辺3mを測る土塙がある。又、龍泉窯青磁2点、鉄小片1点を副葬した土塙墓を1基検出した。



脇山字谷口・会田地区全景 南から

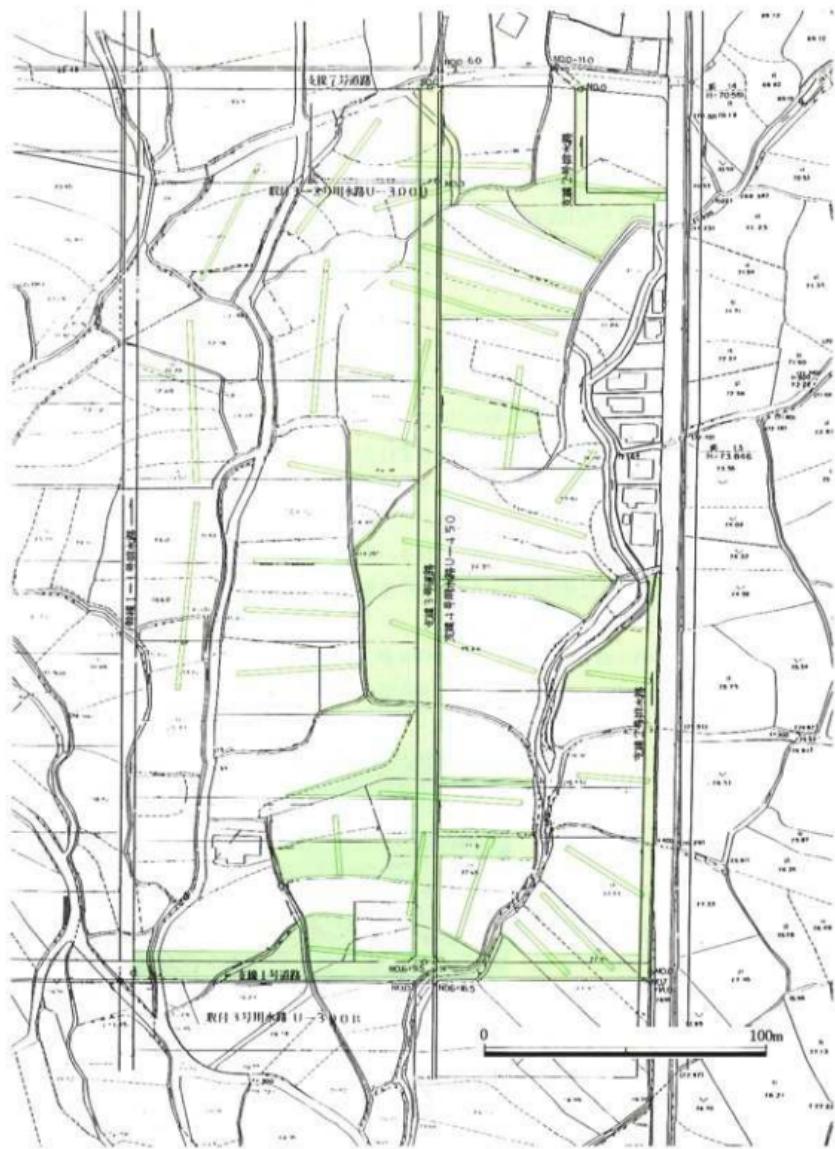
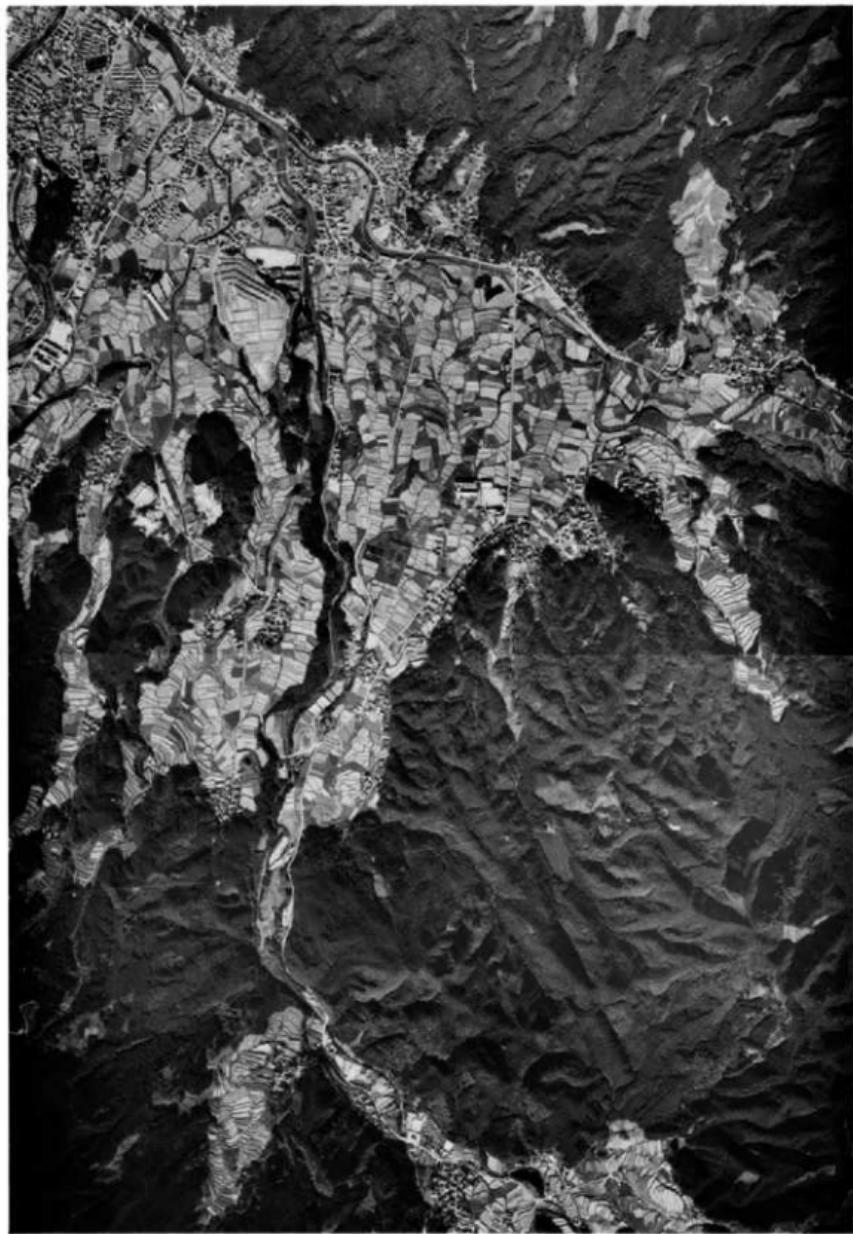


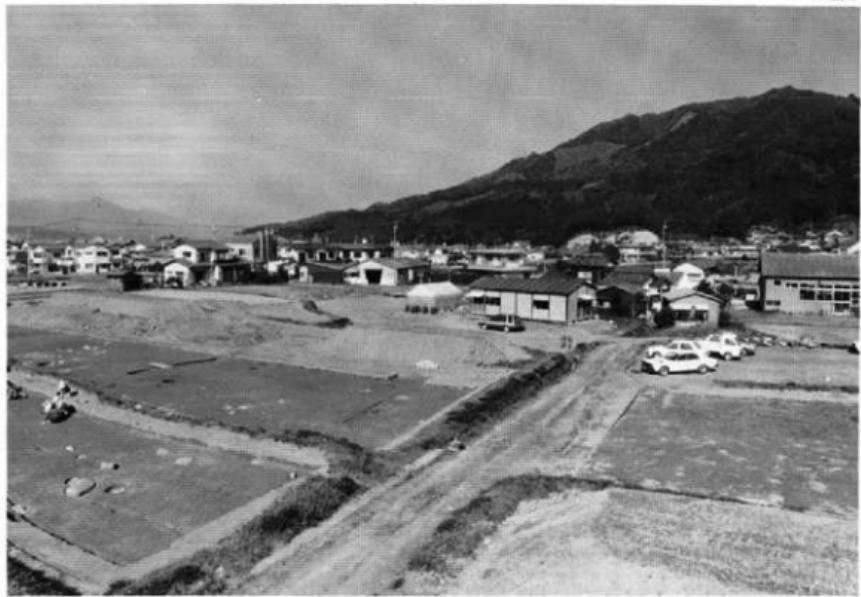
Fig. 30 4次調査の範囲と調査地区の設定・会田地区(1/2,000)

■は試掘トレンチ、又は調査範囲を示す。

図  
版



鶴山全景・航空写真（縮尺1/15,000）



発掘調査風景 第1次（南東から） 調査事務所の後方は荒平山



第1次調査 9区(東から)



第1次調査 8区南(東から)



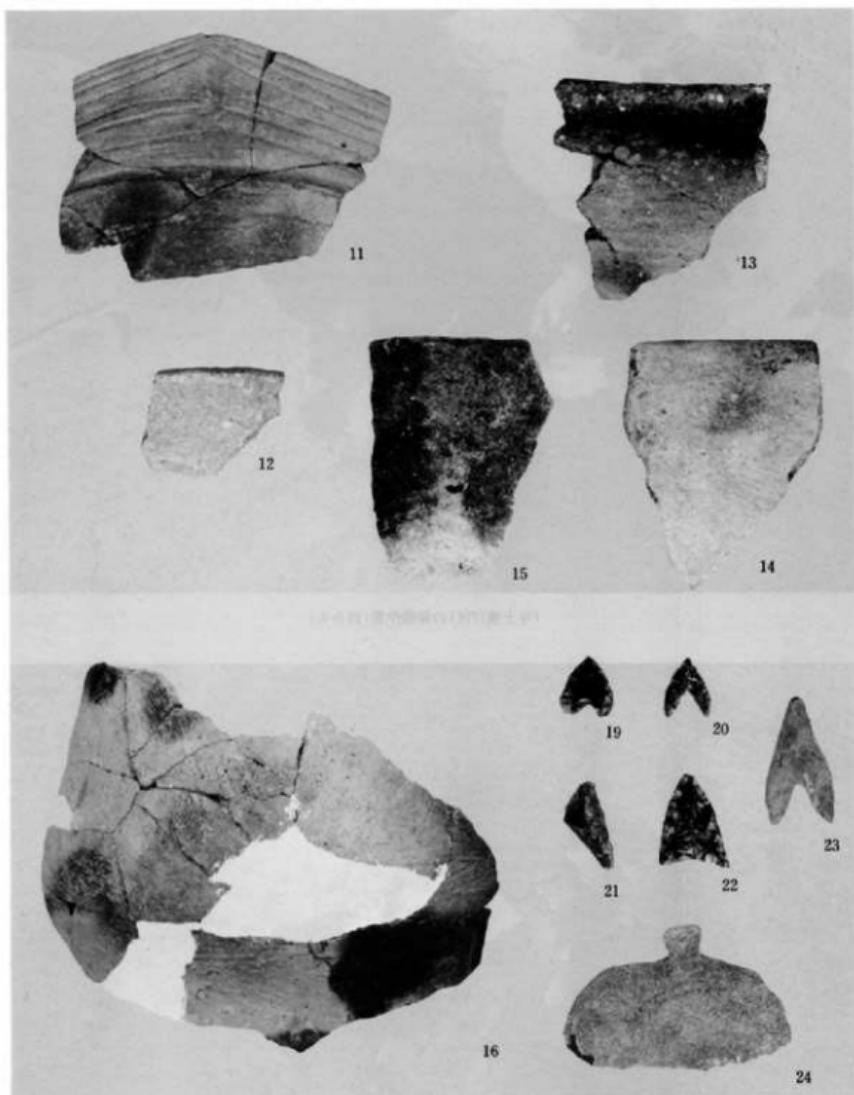
第1次調査 8区北(東から)



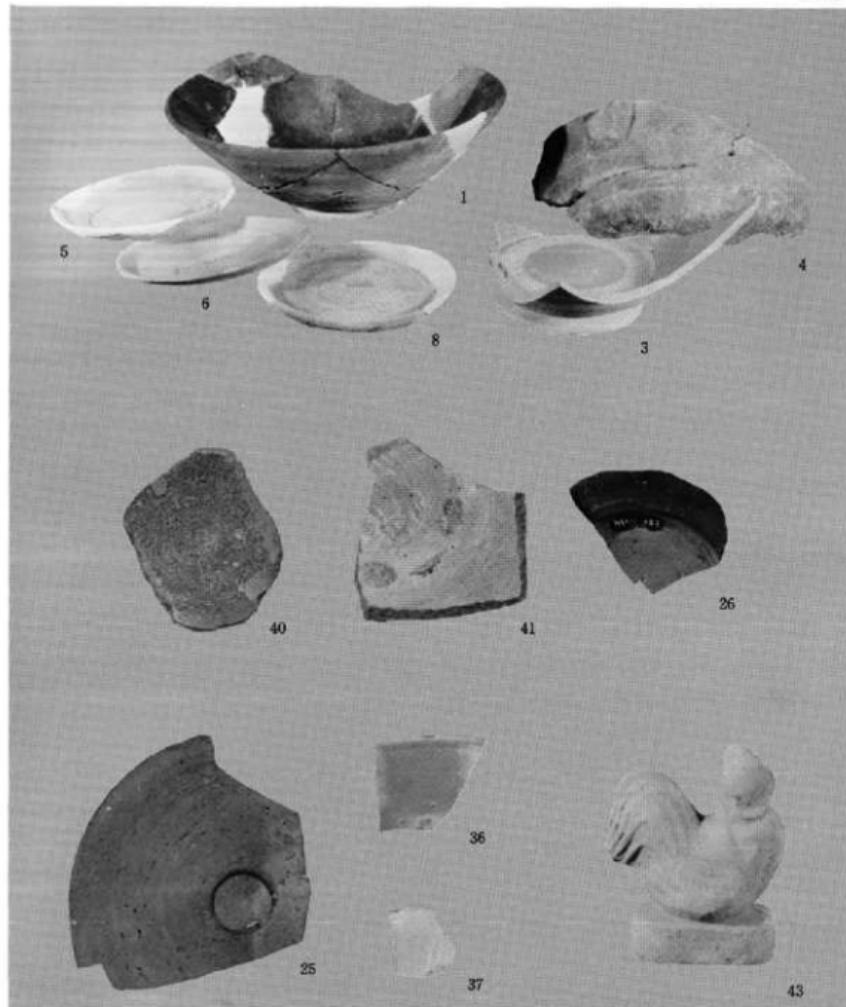
1号土壌(7区)の発掘作業(西から)



1号土壌(7区)(西から)



第1次調査の出土遺物・1



第1次調査の出土遺物・2



第2次調査 5区(南東から)



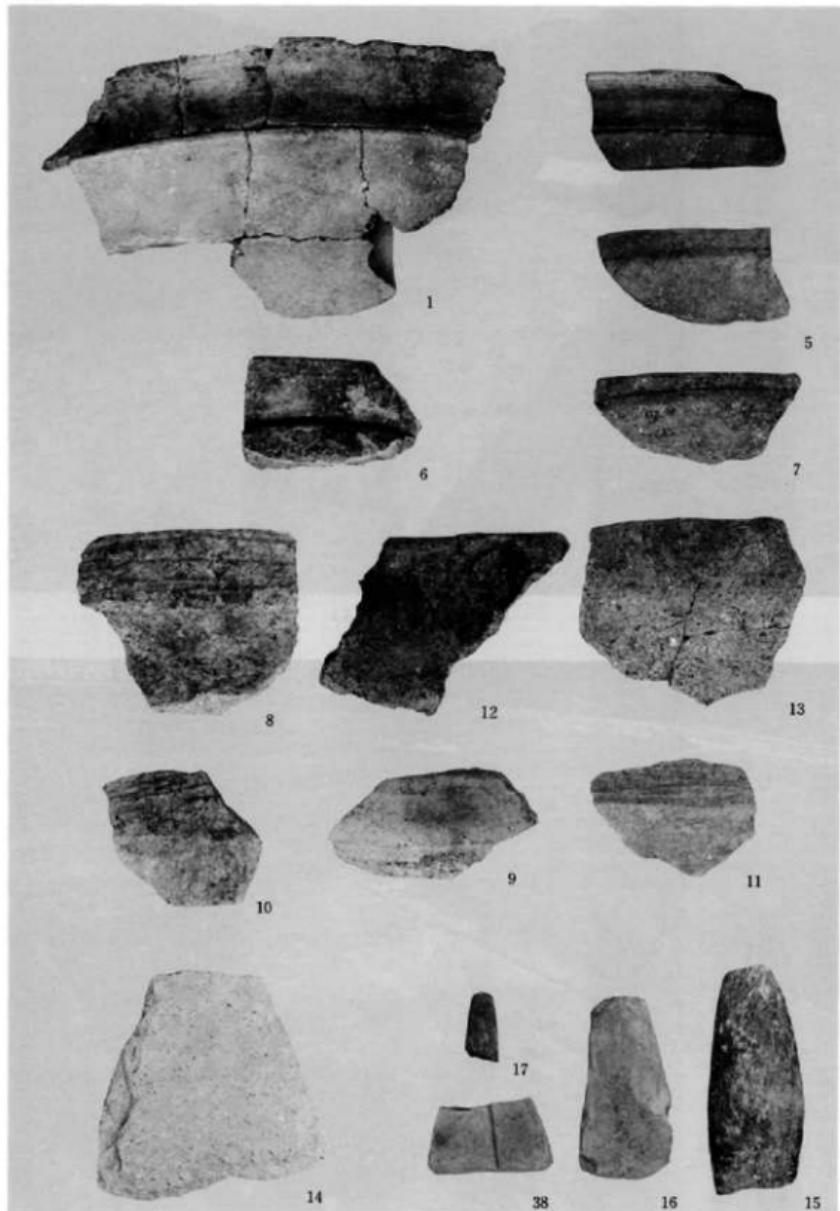
第2次調査 6区(南から)



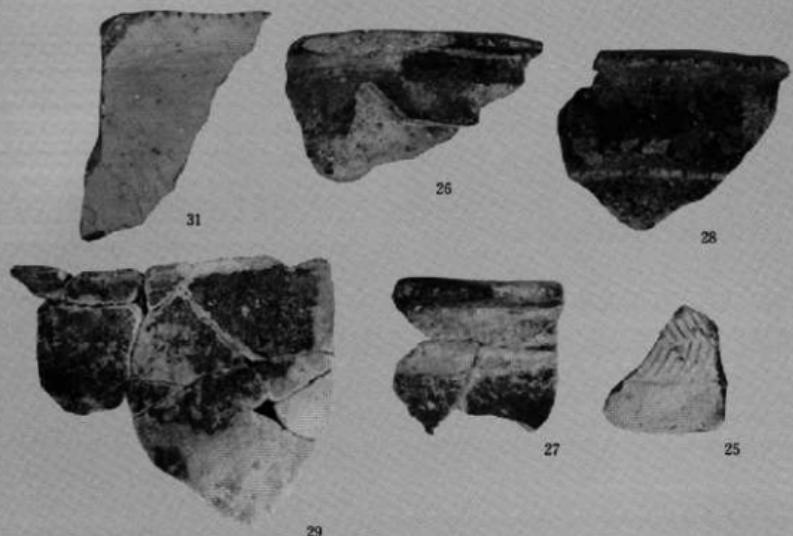
第2次調査 3区(南東から)



第2次調査 3区(南西から) 指をさしている部分で青磁碗が出土した。



第2次調査の出土遺物・1



29



30



33

第2次調査の出土遺物・2



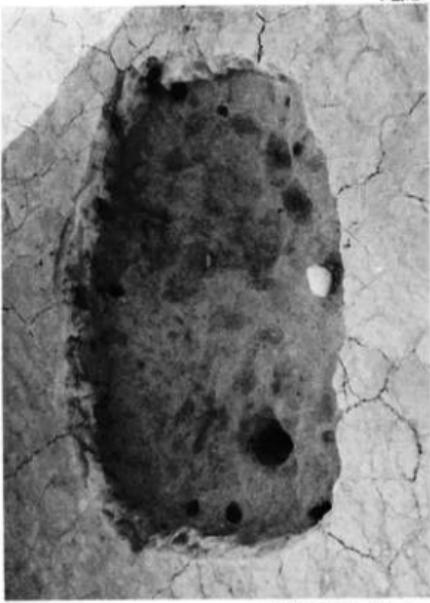
第3大周査区 東側(東から)



同査区 西側(西から)



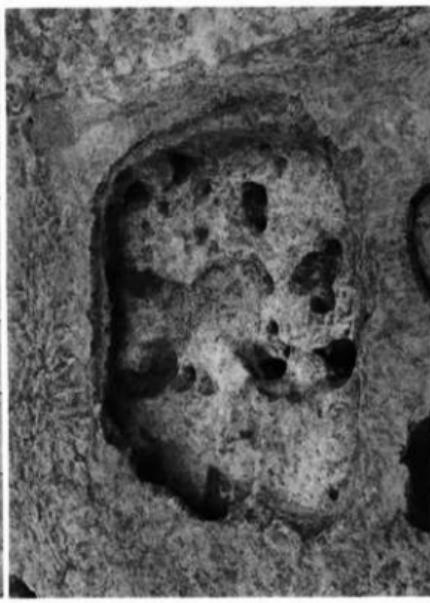
SK-05(炭土層) もたら



SK-05(炭土層) もたら



SK-05(炭土層) まぐら



SK-05(炭土層) 四方



SK-12(粘土層) 西から



SK-14(粘土層) 西から



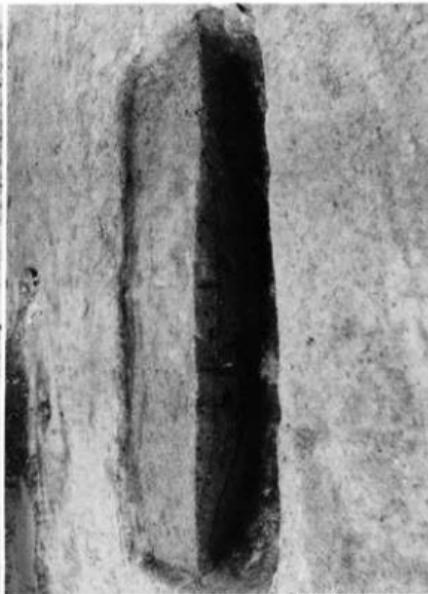
SK-15(粘土層) 北から



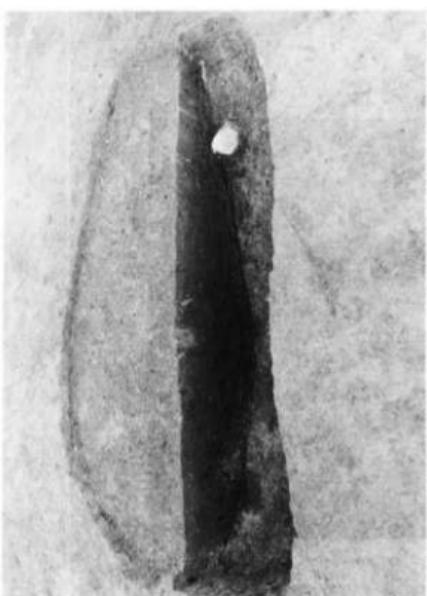
SK-17(粘土層) 西から



のこ-2(岩十層) 横谷



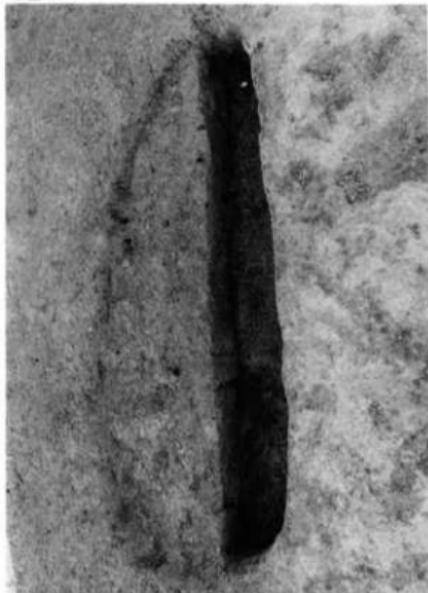
のこ-2(岩十層) 横谷



のこ-2(岩十層) 横谷



のこ-2(岩十層) 横谷



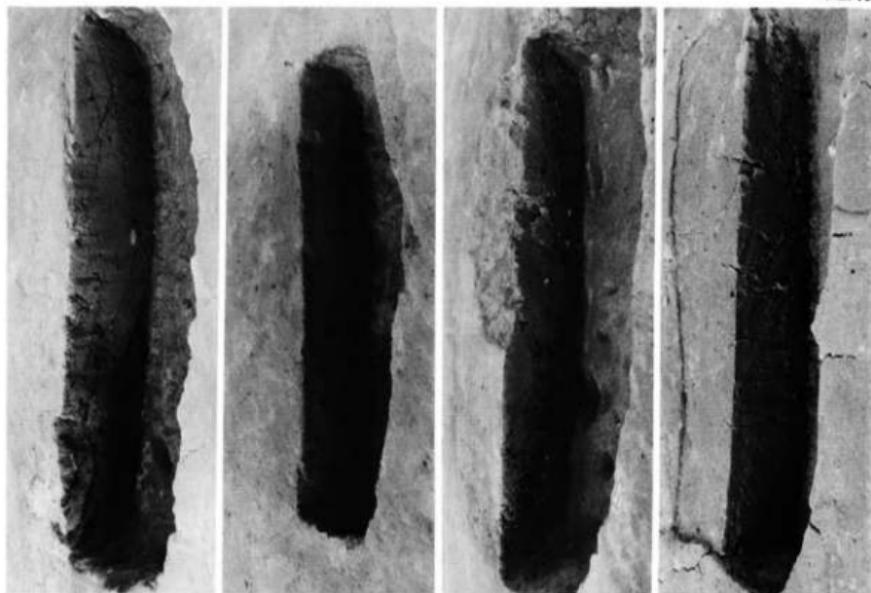
SK-36(燒土甕) 南から



SK-39(燒土甕) 南から



SK-38(大形土甕) 南から

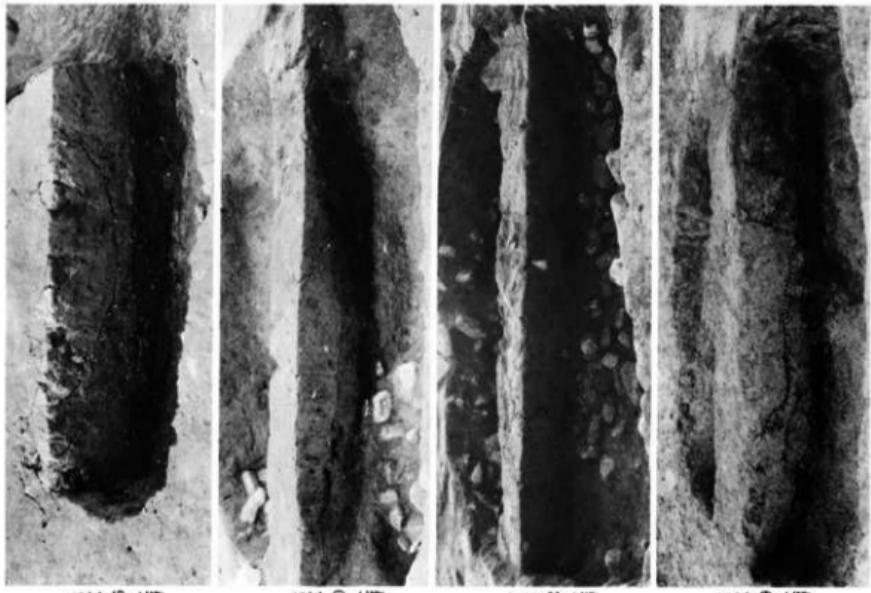


SK-01 土層

SK-02 土層

SK-03 土層

SK-05 土層



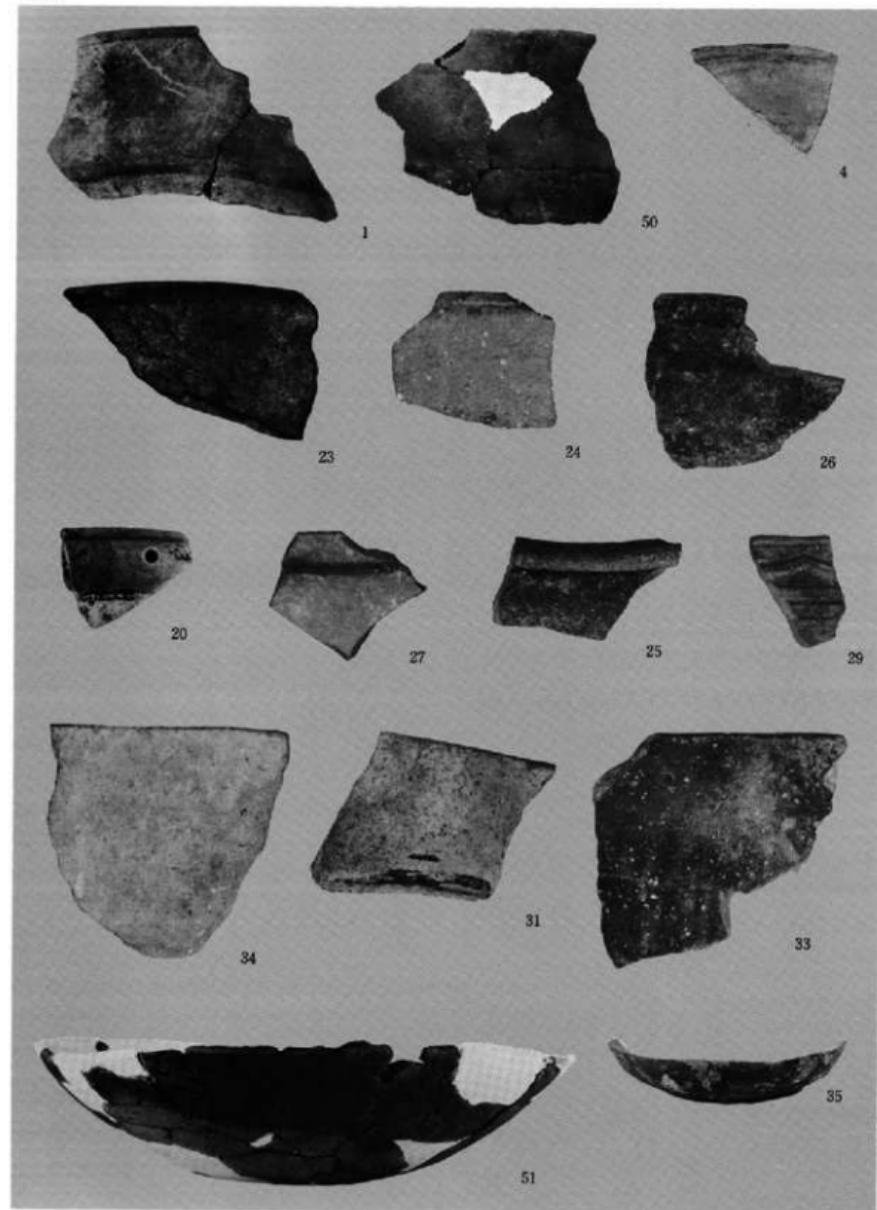
SK-06 土層

SK-10 土層

SK-12 土層

SK-19 土層

燒土坡土層斷面



第3次調査の出土遺物(土器)



第3次調査の出土遺物(石器)



第4次調査・谷口遺跡全景



山櫛をめぐる旧道(舗装された既設道路の下)

---

## 脇山 I

—県営畠場整備事業に伴う発掘調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第236集

平成2年3月31日

発 行：福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1  
印 刷：正光印刷株式会社

---